苟萱桑門筑紫轢

苅萱桑門筑紫轢

作者　並木宗輔
並木丈輔

序詞大道廢れて仁義起り。國家亂れて忠臣を顯す。此語を以て鑑みれば。道にも亦誠の本あり。其誠の源を尋ぬれば。戀慕愛執に如くはなしと。豐葦原の陰神陽神。探り給ひし天の逆鉾。種擴りし世々の祚。御小松の院の御治世。從ひ靡く君子國　オロシ〳〵時めく春の。榮なり。地當今未だ御幼雅なれば。御母通陽門院殿。暫く寶祚を預り給ひ。踏歌の節會を御行事。禁庭守護の武士は。筑前の國の住人。加藤左衞門尉繁氏。宵より詰めて宿直守。假に授かる官職に。在京の其間右大將の烏帽子狩衣。華やかなりし出立も衞士が焚く火に光添へ　フシ威あつて。猛く見えにけり。地色夜半も次第に更過ぎて。明方近き星の影衞士は轝を焚きさして。郁芳門に立出づれば　オクリ代る〳〵時刻と入替り。フシ出て來る衞士は。奥女中。御國母の召使千鳥といへる品者が。長地すつきりとした下げ髮に似合はぬ烏帽子裝束も。派手な風俗柳腰。男欲しがる曲者とは　フシ目許の。愛に知られたり。地繁氏卿の後に立ちどうやら何ぞ言ひたげに。うぢ〳〵すれば振返り。詞是はしたり千鳥御前風流なお姿。扨は今宵の轝火は其許がお勤めか。ハテしやれた衞士。地焚いて貰ふ轝めは果報なやつと挨拶の。中にちつくり色持たす。フシじやれは物師のしるしなり。地色千鳥の前は先取られ何と答も恥かしく。顏を赫めて居たりしが。てんぽの皮と御手を取り。詞七歲餘りの御在京御參内の度毎に裂簾の隙より垣間見て。ひよつと燃えつく戀の轝火。思ひの煙絶えぬ故露程なりと此心を。地申上げ度き願ひに

て形を窶す衞士の役。胸の焚く火に焦がれ死ぬ。命を助け給はれと御袴腰に。フシ抱きつく。地色もとより好む色男子。否にはあらぬいな船の。漂ふ心を押鎭め。詞志は過分ながら。禁中在番の某。御所の女中に不義ありなどと。風聞あつては後日の難儀。地折もあらんと言捨てゝ。振切り給ふをそりやならぬ。詞はもじい事のありたけを。言はして置いて胴慾な。地色お上の事は公なれば。こんな詮議はござんせぬ。よしお咎めがあるならば。罪を私が一人して請けませう。其段には氣遣ひなくどうなとせうとつい一口。嬉しいお詞聞かせてたべ。さうなければ何ぼでも。フシ放しやせぬと取付くを。詞イヤ〳〵それは勝手了簡。高呑込みで請合はれぬ。地色赦し給へと振放し。あなたこなたへ外しても。猶も放れず附纏ふ折もこそあれ御簾を卷上げ。御母通陽門院。關白良基公を始とし公卿を伴ひ出て給へば。二人は庭に敗亡の。逃げもやられず平伏はフシあやまり。入りし風情なり。地色國母御譽麗しく。苦しからず遠慮なせそ。深くも思ひ染めたりし色をば如何でさますべき。詞コレ〳〵繁氏。國に妻子を殘し置き枕の伽も七歳餘り。地懈怠なき勤番の褒美に千鳥を取らすべし。淋しき閨の宍とせよ。詞その往昔近衞の院。源三位頼政に下されしは。池の眞菰に水増して引きぞ煩ふ菖蒲の前。地それには引替へ纏風に吹立てられし浪の上鳴き騒いだる千鳥ぞや。永く比翼の友羽交打交せよと宣旨あれば。コハ有難しと繁氏卿。千鳥は猶も悦びの。胸落着けど心はせき。詞又もや御意の變らぬ内。私はお屋敷へお先へ參つて待ちませう。地色お前は跡から御歸館と。早しこなせし妻氣質。フシいそいそ立つて入りにけり。地色折から知らず朝嵐。人の面も白々とオグリ明渡べりたるフシ四方の空。地色御番の代りと聲かけて。豐前の大領大内之助義弘が舊臣。多々羅新洞左衞門秀貫。白髮まじりの曲者階下間近く額を下げ。詞今日守護の勤番は。主人大内義弘が役目の所。此間より所勞に依つて某が名代。地御赦免仰ぎ奉ると奏すれば繁氏立寄り。詞病氣とあれば餘儀なき仕合せ。天子にも勅許あるべし。地色イザ役目を讓り代らんと立出でんとフシ給ふ所へ。地色執權監物太郎信俊。奏聞の事ありと訴へ出てて庭上に畏り。詞扨も高雄の御山は觀音薩埵の靈驗あつく。

諸人の信心日々にいや増し。歩みを運ぶ靈地なるに。十日許り以前より身に香染の袈裟をかけ。荊棘の髪ふり亂し。高足駄にて異形の行人。夜は洞穴に取籠り。晝は山を徘徊して。往來を惱ます由昨夜陰に及びての注進。地如何計ひ申さんやと申上ぐれば。關白良基公笏取直し。詞出家ならば佛意を慕ひ。難行苦行に身を凝らし。道を試す敎もあり。有髪の行者は心得ず。殊に往來を惱ます由。何にもせよ聞捨てになり難し。地帝都の騷ぎにならざる樣。汝密かに行向ひ。都の内を追拂ふか。異議に及ばは召捕つて糺明せよと。仰せの内より承ると立つ所を。新洞左衞門暫しと呼びとめ御前に向ひ 詞夜前迄は彼が主繁氏の勤番。今朝よりは手前の主人。大内義弘が役目。地此討手某めに仰せ付けられ下されと。顧へばやがて監物太郎イヤこれ新洞殿。詞高雄山は北嵯峨に相續き。主君繁氏が預り場所。其上拙者が承つた役目。横間より手前へとは。我儘至極と。言はせも立てずヤア武の道から武を望むを我儘とは舌長し。地色是非この討手は某にと。いひ捨て立つをどこへ〳〵。詞人の役目をよい年して。かち落さうとは大人氣なし。地似合うたやうに圓座の上。髭を數へて居召されと。詞あらして駈行くを走りかゝつてしつかと捉へ。詞年は寄つても此親爺。まだ腕先には覺えがある。地行かれうならば往て見よと。引止めたる力瘤。エヽ面倒なる老耄めと。捥放せば摑付く。待てよ〳〵と關白の仰せも聞かず繁氏の。詞も餘所に監物太郎一ふり振つて振放し。飛ぶが如くに駈出すを。奈落までもと新洞左衞門。辭儀も作法も白砂を。フシ踏散らしてぞ追うて行く。地色通陽門院觀感あり。大内には歌爭ひ武士は武を爭ふ。其家々の習ひとて勇ましき有樣かな。勇む心に迎ひを待たず。嫁入急ぎし千鳥の前さぞ館にて待兼ねん。宿の堺を駿めて友鳴きにせよ繁氏と。御褥を立ち給ふ御戲れは常陸帶。結ぶ契りは。千代八千代。かはらぬ。國の。三重、春風も。フシ匂ひを含む。一霞。都は辰巳高雄山峯は斜の白雲に。巖聳えて茫々たる。雲もとけ行く谷川の。スヱ苔滑かに松の聲。げに物凄きフシ景色なり。地色被衣に靡く若草の素足で拾ふ御所女中。本フシ男交りにざめくは。地千鳥御前のお乘物繁氏卿のお館へ。押付けて行く嫁入分道を廻つて觀音詣で。結ぶ誓ひの鐘

の緒に縁も長き山坂を。息休めにとお乘物 フシ松の。木蔭に立てければ。 地色けふぞ雲井の眉とけて立出で給ふ千鳥の前。花を隈取る御姿。褄吹返す戀風も フシ憂きとや人は羨まし。 地色腰元どもはざわ〳〵と駕籠を放れし里雀。中にも梢が囀りて。 詞何と皆の衆。小面の憎い此松に。抱付いた藤わいの。丁度あのやうに千鳥様も。繁氏様にしがみ付いてござらうの。 地あんな器量のよい殿御御果報なあやかり者と。なぶりかゝれば碾が差出で。 詞そりや知れた事云やるがくだ。したがどうも呑込まぬは彼方のお心。今迄は御所住居やもめ鳥の千鳥様。飛立つ程に思召し。一寸でも早うお屋敷へござる筈。 地それに氣疎い廻りして。觀音參りが心得ぬ。お持たせ振の道草かと尋ぬれば打笑み給ひ。 詞様子知らねばさう思ふも道理。言ひ出すも恥かしい。 フシ事ながら。 地色繁氏様に惚れたのは今更の事ならず。とうから惚れて居るわいの。 詞お國には石動君とて。若殿まである御臺様。歴乎としてござるとは知りながら。 地思ひためては忘られず焚付けて見る衞士の篝火。姿をくろむ濡衣つい門院様に見付けられ。はつと心に思ひの外。 詞お氣の通つた粋な勅諚。是といふも自らが年月念ずる心の誠。偏に觀音様の御利生と思ふから。道寄りしてのお禮參り。 地ヲ、恥かしとばかりにて フシ御乘物に召し給へば。 地色それならば御尤もいよ〳〵大悲のお力で。いぢむぢのない様に晩からは念彼のだん。段々によい戀枕うん〳〵雲雷跋掣電。雷に臍取られぬ内。急ぎや〳〵と我一に。行きかゝりたる フシ向ふより。 地色惡者作の深編笠。供先押割り。のつさのさ。ちと乘物へ御訴訟と。のさばりながら立寄れば家來の者ども聲々に。 詞願ひ訴訟の事ならばなぜ記錄所へ往てぬかさぬ。 地ハレ狼狽た素浪人と。嘲笑へどもつとも怯まず。汝等が知つた事でなしと。押除けて乘物の傍近く。 詞コリヤ妹。見ぬ顔するは手が惡い。兄黒塚の鬼藏人見忘れはしよまいがな。最前から様子を聞けば。そちは今日繁氏殿へ嫁入をするとの話。それなれば無心がある。某をお館へ連行き。私が兄でござる。お取立て頼みますとたつた一口詞を添へなば。義理にでも繁氏殿世話しやらねばならぬ事。さすれば兄が身上にありつく。免角いへば思案があると。 地妹に向ひ居合腰刀ひねくり嚇せしは。 フシ大

人氣なくも面憎し。地當惑ながら千鳥の前乘物の戸を押明けて。詞珍らしや藏人殿。まだ息災で此世にござるか。へエ、こなたはの。いふに及ばぬ事なれども。父上黒塚群寮樣は。代々續く禁裡の博士。君の覺えも目度出き家柄。男の子とては其許お一人。跡目も相續する身を以て。地十年以前清涼殿のお能の時。醉狂の上人を過ち。直ぐにそれよりお前は駈落。其お咎めにて父上は浪人し給ひ貧しき世渡り。詞悴故に家を潰し。先祖へ對して言譯なし。必ず何處で出逢うても。兄と思はゞ共に勘當と。地御遺言にて貧家の死をば。フシなされたぞや。地色それに今更妹よ千鳥よとは。どの顏下げて對面ぞと。恥しめられてさしもの惡者。押俯向いて詞なく。フシ砂にのゝ字を書きゐたり。地色千鳥の前は涙を押へ。アヽ恨むまじ返らぬ事。皆の衆の手前も思はず。よしなき昔の長話。日もたけて嘸やさぞ繁氏樣にもお待兼ね。フシ心せかれと宣へば。地色そりやお急ぎよと六尺ども腰を振出す五枚肩。行く乘物の棒しつかと捉へ。詞イヤ妹さううまうは拔けさせぬ。いづく迄も同道と。地ねけけかゝれば家來の者ども目をむき出し。詞聞いた樣子が大泥坊。兄貴めでも大事ない。性根の直る意見の爲。目に物見せんと立ちかゝり。遠慮會釋もなま木の息杖。地色足腰かけて用捨なく連枷投げに打ちのめし。厄介な縄くらひ。棒をくらふとよい氣味かとどつとフシ笑うて行過ぎる。地色藏人やう〳〵起上り背骨を擦り齒がみをなし。ヘエヽ罰當りの妹め。此分で濟まさうかと駈出す後の方。暫し〳〵と止むる行相。紅の衣を身に纏ひ亂鬢逆に生ひ茂り。一丈餘りの桂の杖。高足駄踏みならし悠悠と立出づる。さしもの藏人肝を消しフシ暫し。詞もなかりけり。詞ホヽ目馴れぬ姿不審顏は尤も〳〵。我この程より大願の仔細あつて。當山に分け入り身を凝らせど。胎金兩部の峯も慕はず。赤木の珠數を押揉んでは。四海を胸に疊む妙術。汝妹が緣を賴みに。繁氏に仕へんとは廻り遠き分別。地某が幕下に付かば高祿を得せしめ。先途を見屆け取らすべしと。さも横柄なる詞つき。地色何がな搔き付く猿智慧の押直つて頭を下げ。詞何がさて〳〵。落着く嶋もない某。いか樣ともお眼識に預りたしと手をつけば。地ヲヽ賴もしゝ〳〵。いて〳〵汝が高祿出世の手がかりとなる

判じ物。よく判じよと歩み寄り。松にからみし藤かづら。若葉は爰ぞと杖取りのべて。ちやう〳〵〳〵と二枝三枝。薙落して是見よや。元來加藤は藤原氏。其藤をまつ此如く切放す。早く此心を察せよと。いふに角ぐむ鬼藏人。額の皺に智慧かき寄せ。詞ム、ム、ム、近年の謎したり〳〵。其藤原の藤の枝を切捨て給ふは此藏人に。繁氏が首ア、聲高し密かに〳〵。すりや判じたる心底は。成程討つ氣でござれども。未だ君の御名をも明かされねば。地色あつとは得こそ申すまじ先づ姓名をお聞かせと。いふに頷きホ、うい奴出來いた〳〵。かく胸中を見据ゑし上は何をか包まん。詞もと某當山に住む者ならず。九州に隱れなき大内之助義弘といふ者。そも此山に艱苦する事。我多年天下を望み。日夜朝暮大玄谷神の呪を唱へ。又は諸國の安否を窺ひ。國家を握る企なれども。合點の行かぬは繁氏一人助け置いては大望の妨げと。地語る半ばへ巒の音程近く聞ゆれば。奇異の思ひを大内之助眼をくばりヤアラ心許なし。詞暫しが内我は窟に身を隱さん。地汝も暫し忍べよと言含めつゝ。引別れ オクリ茂りの〻内へ入りにける 江戸フシ夕日に背けて向ふ高雄山勇みの鈴も華やかに馬上ゆゝしく乘りたるは。ナホス地監物太郎信俊身は腹卷に小手脛當。暫時に駈ける沛艾馬。鞍に引添ふ譜代の郎黨。大佛新藏諸侍。息をはかりに。フシ駈來る所へ。地色遙かに下つてオ、イ。オイと呼びかける。心せけども監物太郎何事やらんと手綱かいくり。駒を返せば新洞左衞門頭に星霜降り積れど。身體は忠義の韋駄天走り徒立ちになつて駈着け。詞ヤア曲もなや監物太郎。朝廷にても爭ひし今日の討手。是非某にふり代り。其方密に歸つてくれ。地頻む〳〵といふ間を待兼ね。ヤア心得ぬ御邊が胸中。詞さまでの討手にもあらざるに息筋張つての所望。但し其曲者に由緣あるや。心底明かさば品により了簡もあるべきが。無體の望み詞し〳〵。ホ、ウそれも尤も。何を隱さう閑居して。異相に見ゆる行人は。我主君大内之助義弘殿。ヲ、驚きはさこそ〳〵。地かく打明ける上からは爰が互の了簡づくと。いふを打消し蹴荒らげ。詞さう聞いては猶許されぬ。禁裡表は所勞と僞り。此山に隱れ住んで。何の爲の難行苦行。それを明かさば兎も角も。地サア其樣子は仔細はと。問詰められてイヤ其儀は。其

事はと。差詰つたる返答にヤア狼狽へたる一言。詞家來として主の心推察せずに仕へるか。善ならば善。惡ならばなぜ諫言を加へぬぞ。地不覺者と言捨てに引直す轡面。押取つて引きとゞめヲヽ尤もなり監物太郎。詞汝が主の繁氏殿とは事かはり。主君大内は古今の猛將の思ひ込んだる初一念中々家來の諫めも聞かず。存じ付いたる大願ありと。仔細言はずの山籠り。地禁廷へは所勞の言立て。萬一此事顯れては上を掠むる大罪。大内の家の滅亡。詞さるに依つて某が無體に討手の役目を願ふ。地主持つた身は相互。一生覺えぬ此親爺が。手をさげる聞分けよと。いへども聞かずいやいや〳〵。詞洞穴に壇を築き不及の望なす者多し。假初ならぬ勅命を請け。善とも惡とも仔細を聞かず。私に了簡する事ならぬ〳〵。コリヤ大佛。無益に時刻も押移る。構はずとも皆引連れ山の手をおつ取卷き。地大内之助を逃がすなと下知に從ひ供廻り。フシ一度に勇み入りにける。地色元より短慮の新洞左衞門。無念とや思ひけん。詞ヤア奇怪なり監物太郎。六十に餘る某に。樣々の口叩かせ。其上主君と名を明かさせ。無得心なる人畜生。地いつ迄も動かせじと。乘つたる馬の尾筒をおつ取り引戻せば。又馬上には障泥を打ち。ハイ〳〵〳〵と乘出す。コハリ互の忠義に精氣をもみ。心は逸れど老の腕。次第にゆるむ疲れを見込み。ナホス地爰ぞと監物はずみにあふり。丁ど當つれば跳上ぐる。馬の蹴上げに新洞左衞門跳倒されて反る所を。障泥と鞭を打重ね〳〵。馬を飛ばして一散に。フシ奥山指して駈り行く。地色新洞怒りの齒を噛みしめ。忠義に固まる老の兩足。踏固め踏みしめて追つかけ行く一筋道。通りかゝりし鉄乘物。向ふ見ずの新洞左衞門。供先おし割り駈行くをつき〳〵の待立塞がり。詞不作法なる老耄。此乘物に召したるは忝くも禁中より。繁氏卿へ御入りある千鳥の前。片寄れ。フシ下れと罵つたり。地色新洞左衞門。心附き是こそ監物めに。ほ手合させる質物と。乘物の棒しつかと捉へ。詞ハレよい所へ千鳥の前。乘物を踏碎き駈通るは易けれども。こつちに少し入用な。元の所へ舁き戻せ。宰領は此親爺と力に任せこりや〳〵〳〵。エイ〳〵〳〵と突戻せば。地色眞青に腰元ども足もよろ〳〵六尺も。降つて湧いたる災難もすべきやうなく理不盡に。フシ深山をさして押しのぼ

す。 地色暫らくあつて山の頂。義弘が籠りたる洞の邊をうそ〳〵と。尋ね廻りし若侍頬冠にて顔隠し。空乘物をこなたに吊らせ巖の前に禮儀正しく。 詞イカニ我が君義弘卿。今日禁庭の風聞。當山に於て隱住の族。急ぎ誅せよとの勅諚にて。則ち討手向ふの評定。此儀密かに達せよと。主人新洞左衞門が注進によつて。則ち家來岩淵平馬御迎ひに參上と。 フシ似つこらしげに呼ばはれば。 地色洞の扉を押開き。義弘は寛々とさあらぬ體にて歩出で。 詞なに新洞が家來迎ひに來りしとな。大義を起す某。 地小事の害を待たんより一先づ此場を遁れんと。乘物引寄せ飛移れば。仕濟ましたりと鐵の大網。 フシ双方より打着すれば。 地監物太郎駈來り大聲上げ。 詞ヤア〳〵大内。武士の山籠り不審を晴らせの勅命にて。加藤左衞門繁氏が家來監物太郎向うたり。 地言譯あらば天奏にて申開かれよといふ聲を。聞くよりも大内之助五體を搖る唸り聲。 詞ヤア〳〵黒塚は居り合はぬか。藏人は出合はぬかと。 地乘物兩手にめり〳〵ぐわたぐわた。一人前の大地震うめく谺に鬼藏人。尻引つからげ飛來り。有無をいはずに無二無三斬つてかゝれば大佛新藏。丁ど受けて フシ受流し。 地色眞向微塵と斬りかくれば。コハ叶はじと鬼藏人 フシはふ〳〵逃げて失せにけり。 地色かかる折しも岩蔭より。新洞左衞門秀貫が追立て來る鉄乘物。 詞コリヤ〳〵監物。推量が其乘物某が主君大内殿よな。さこそと知つてこつちもぬからぬ。此奪取りし乘物は汝が主人繁氏へ。禁中より下されし千鳥の前。奪取つたは汝へ面當。主君大内を戻せばよし。さもなくば恨みの双此乘物へ突通すいかに〳〵と聲かけたり。 地南無三寶と監物太郎。 詞コリヤ新洞。勅命下りし千鳥の前殺さば汝朝敵同然。ヤア主を擒になすからは破れかぶれ。 地サア返答はと双の影ヤレ待てせくな〳〵。 詞左程忠義を立てる根性。無下にするも本意ならず。殊に主君の寵愛殺さるゝも殘念。 地理を非に曲げて乘物ぐるめ打換へて得させんさりながら。 詞勅命請けて生捕つたる曲者。私に助けては朝家の聞えも恐れあり。此儀にあぐむと言はせも立てず。ヤレそれは一途。高雄山の異行人おつ拂へとは最初の勅。生捕れとは異議に及ぶ時の事と。 地いふに頷きそれよ〳〵。 詞いざ乘物を表立ち渡してくれう安堵せよと。 地家來に言付け舁上げさ

せ。詞こりや〳〵新洞確に聞け。洛中洛外。追放の行人網きせて渡すぞと。地いふに喜び尤も〳〵また。幾千代の友白髮祝ふ嫁御の色直し。雲井の薫。蘭麝の乘物。双方一度に取換し。損德なしの山道を分けて信俊。秀貫が肩も揃うてエイサツサ。誘ふ嵐の入相は。かねて思ひの羽を伸し。フシ濡るゝ鴛鴦。妹脊鳥とこれは遁れぬ網鳥や。網代のうきに大内之助。伴ひ歸る忠臣義士。例は少き君が代にあぐる。譽は高雄山。勇み。勇むる夕間暮別れ〳〵になりにけり。

第二

唄カヽリ九折坂には繼傳馬。川瀨は船の。自由する八幡山崎二山の　オクリ間を。棹さす船渡し。黃昏よりも火を點し。夜もすがら渡す故。フシ狐川とはいふやらん。地色筑前の國の城主加藤左衞門繁氏卿。勤番の暇詣八幡をかけて山崎や。渡場近くなりければ暫く此方に立休らひ。詞ヤ家來ども。都は洛中洛外とも。何れをいづれと言はれぬ風景。地わけて男山の昔を尋ぬるに。豐前の國宇佐の郡より勸請ありし正八幡宮。御鎭座もことわり。紀州伽羅山ともいつつべき御山。入日に輝く風景。いやはやどうも〳〵。斯樣に方々の眺めに心浮れ思はずも日が闌け。詞はや暮に及ぶ提灯の用意はよいか。地色見れば渡し船も向ふへ漕行き戻るを待つも退屈。堤傳ひに行くべきぞ。フシ案内せよとありければ。地色御供の若黨横口戸平。家老顏する綴意者つゝと出でて。詞ハレヤレ殿には御存知ないか。此道は登船の引場。道のだくぼく中々歩まるゝ所ならず。且那は乘物にもお召しなされうが。家來は何になるもの。地渡しをお待ちなされよと。出過ぎた慮外も仁者の優美。詞いか樣三里廻つて本海道といへば。惡所を行くは不行作。地所の名さへ狐川ばかされてはなるまいと。御戲れも時の興。挾箱に腰打掛けフシ暫し。休らひ給ひける。日暮を急ぐ旅人の。五人七人一連れに乘り後れじと岸蔭に。立集れば向ふより。漕來る船も人の鮨着くと。乘人は乘ろとする。

上ろとすると兩方が。揉合ふ中に浪人と思しき武士が上りがけ。又こちらより乘る人も同じ風なる侍が。せり合ふ中を摺合うて何とかしけん互の大小。もぢり合ひしを急ぎ業ほどく拍子に一方の。脇差ぽつきと。折れにける。地色はつとばかりに折られし侍。面目なさに笠傾け。佇む内に相人の浪人。行過ぐるを堪へ兼ね。詞侍暫しと呼びかける。地急ぐ身なれど是非なくも立ちとゞまりし互の氣相。スハ事こそと船は逃げ。繁氏卿も乘後れさながら逃げても退かれねば。詮方煙草くゆらしてフシ打眺めてぞおはします。地色件の侍折れたる脇差拾ひ持ち。相手に向つて詞も荒さず。詞誠に恥を申さねば理が聞えず。拙者めは遠州者。永々の浪人故尾羽打枯し。餓死せんよりはと存じ。武士のあるまじき一腰を賣代なし。奉公稼ぎに西國へ罷下る。時の過ちとは申しながら。此方と摺合ひに此如く差添をこぢ折りあれに歴々も見てござれば。面目のすゝぎ樣なく難儀に及ぶ。地色何とぞ了簡の付くべき儀ならば了簡付けてお通り下され。詞それとも。御思案に及ばずば。地御不肖ながら相手になり。討果して下されうや。フシお返事。次第と相述ぶる。地色相手の侍ちつとも臆せず御尤も至極々々。詞手前麁相者故思はずも不調法。ガ討果す儀をお詫びは申さぬ。しかし差添が竹光故。面目ないとは御胸中が小さい〳〵。アヽこれ〳〵差添でも武士の魂竹光でも苦しうないとはな。ホヽ一筋なお心故。是しきを恥辱と思召す。地イデ果が大恥かいてお目にかけんと。刀抜出し兩手に握り。遠慮會釋も鞘口に。ぽつきと折つて目先へつき付け。詞これ御覽候へ手前も此通り。拙者めは播州浪人。都方へ奉公稼ぎの路銀なにかに詰りまだ其許は差添拙者は刀。地色恥辱は倍增す武士の魂。折つて見せたは外聞を共に現はすお腹癒せ。詞それとも打果す儀に違背は致さぬ。お相手にならうか。と申して好みも致さず。又逃げも仕らぬ。地色いか樣とも御勝手次第。サアお返事はと膝立直せば。ヤレおせきなされな言分ない。詞ハレ其許にもいかい艱難なされたの。地色よしなき儀を申しかけお刀を折らし。お腰があいて氣の毒。詞イヤ拙者めが麁相で其許のお腰が。ハテそれは此方も麁相。是は〳〵。夜中故しかとお顏も見えず。地御緣あらば重ねてお近附きに罷りならう。詞左樣致さう。

ハレヤレお暇を取りましたと。地互の禮儀フシ砂打拂ひ。立別るゝを横口戸平。大口あいて高笑ひ。詞ヤレ〳〵。いかに浪人すればとて。折れる物を腰に挾み。奉公稼ぎとは野太い和郎たち。地色イデ武士の見せしめに面見ておこと立上るを。繁氏はつたと脫付け給ひ。御帶刀に手をかけて怒りを含む御顏ばせ。惡者づくりも主の威にフシ恐れてかしこに。うづくまる。地色行過ぎたる二人の侍立ち止まつて一思案。心ならずも双方が引返して暫くは。互に詞もなかりしが。脇差折られし侍小腰をかゞめ。詞誠に其許には刀を折り。我が心を宥め下されたれども。今お聞きの通りあれなる御家來。何かと惡口せられ。何とも此場が濟み難し。地色御思案極め下されと横口戸平を尻目にかけ怒りを含む物腰に。詞いか樣。あの通りに沙汰あつては。お互に身上仕官の妨げ。地色一旦濟んだる事なるによしなき匹夫の口先故。討果す事近頃殘念。詞と言うてあれしきを相手にも大人氣なし。また其主人へ兎や角いはゞ浪人の糧に盡き物取りなどとさみせられん。エヽ是非もなき次第。地色此上は潔う刺違へ。最期を共に致すまいか。詞成程拂者もその覺悟。ハテ命冥加な下郎めと。地色繰返し〳〵殘り多げに戸平を脫付け。詞イザ此所て。地尤もと双方最期の身拵へ。繁氏外の家來を招き何か囁き給ふにぞ。相心得て乘物より。御差替の大小をフシやがて取出し差上ぐる。地色其間に兩人座を占めて。既にかうよと見えければ。ヤレ暫らくと立寄り給ひ。詞最前より御兩所の心底尤もさこそあるべき儀。併し。大功は細瑾を顧みずと申す。僅かの恥に命を捨て。いづくの誰と知らざれば犬死も同然。またお腰のあいたるは。地色差錆びたれども某が差替にて塞ぎたし。異議なく貰ひ給はらば喜悅ならんと一腰宛。差出し給へば兩人とも。はつとばかりに平伏し。有難き御裁配。違背申すは憚りながら。詞いづくいかなる御方とも存ぜず。まして御恩受ける筋なし。地此儀は御免と辭退の詞。ホヽ一理あり至極せり。詞其儀は。筑前の國加藤左衞門繁氏と申す者。即ち當所は。禁庭より馬の飼領に下し置かれ拂者が領分。其場にて兩人とも横死あつては跡の難儀其難儀を遁れん爲。進上申す此兩腰快く受け給はゞ。いかばかり大慶と。地退引ならぬ仁者の詞。ハヽハヽ。はつと押戴き〳〵。

冥加に餘る御情いつの世にかは忘るべき。元我々は何某と。いはんとするをア、これ〳〵。詞お名承つては。恩にかけると申すもの志が無足致す。顔も知らず名も知らず。重ねてお目にかゝつてもお近附でござらぬぞ。急ぎの道お出であれ。お立ちあれと。地慈悲に慈悲ます御詞。兩人餘りの有難さに返す詞もなき中に。猶も手をつき頭を下げ。詞斯くまで深き御情申すは恐れ多けれども。とてもの事に此場の仕儀。御家來も沙汰なき樣。地仰せ付けられ下されと。願へば繁氏返答なく。最前笑ひし若黨の横口戸平を呼出し。詞汝に別して用事あり。是へ來れと仰せに任せ。地色何心なく來る所を飛びかゝつて首打落し。詞手前の政道は斯くの通り外に他言は致すまい。地お別れ申すと細道を。わけて情の御裁き。有難しとも兩人は御後影。伏拜み。伏拜み。爰は所も男山フシ正八。幡の化身かと。思ふ迷ひも狐川。渡しを急ぐ旅人と。陸を早める浪人の。心は一つ。行く道は。二つに隔つ。淀堤左右へ。こそは。三重八別れ行く。地色梅を諸木の兄とせばフシ櫻は花の。振袖や。姉が小路に美を盡くし華麗を飾る殿造り。加藤左衞門繁氏の館には。庭を野山と櫻狩上下。フシざゝめき賑へり。地色奥方近き坪の内下部の出入叶はねば。腰元衆が掃除役。中にも小りうが竹箒塵取りさらへと掻きまぜて。問はず語りに何と皆の衆。詞此廣庭へ出臍の樣にあの社は何といふ神樣ぞ。あた邪魔な掃除がならぬ。箒ついでに掃出そぢやあるまいか。コレあの人とした事が。あれはお國から勸請なされた殿樣の氏神樣。麁末になどしやつたら。逆罰が當ろぞやム、お國から取寄せるのをば勸請といふかや。そんなら今度お國から。勸請なされた御臺樣。千鳥樣と殿樣のしつぽりを御覽じたら。ふんすんでたまるまいと。地案じたはあての槌。お妾女郎と奥樣の中のよいのはどうした事。あんまりで拍子が無い。序に悋氣もお國から。勸請したらよからうと。フシ苦もしともなき高咄。地色折から塀の外面には。萬よしなを取交ぜて。賣る商人の聲高くほの聞ゆれば腰元ども。詞そりやこそいつもの百物寳。地小面の憎い商人め裏門から呼込んで。嬲つて遊ぼぢやあるまいか。こりやよからうと騒ぎ立ち何がな見たがる聞きたがる。浮氣盛りの女の童門の戸明けて呼込めば。詞ハイ粉類

なら何なりと。蕃椒でも胡椒でも。イヤそんなもな入りませぬ。いつもの樣に賣立てゝ聞かさつしやれ。それが厭なら何にも買はぬ。地色早う〳〵と口々に。せがみ立てられまつかせと。頻杖ついて聲張上げ。三下り唄のこ〳〵や豆の粉や。まめな手くせに尻こぶた。ふつつりひゝりと山椒の粉。奴樣には蕃椒。坊主の好きな胡椒の粉。若い嫁御のはなはじく。姑御には辛子の粉。おてきに盃さしもぐさ。合身柱。直違。すゑて心もちや。吉野葛。ナホスフシ召しませいとぞ賣りにける。地色腰元どもは目を引き袖引き。詞マア當分何にも入らぬ。大儀によう喋りやつた。地のこ〳〵去にやと打笑ひ。フシ一度に奥へ走り入る。地商人は荷を下し。詞エ、今日も亦取りくさつた。テモなめ過ぎた女郎さいどもと。地呟きうそ〳〵差覗き。うろつく内に監物太郎。ひよつと來かゝり小蔭にて。窺ひ居るとも知らぬが天命。荷箱の内より大小取出し。身拵へしてのつさ〳〵。忍び入るを曲者待てと呼びかけられ。南無三寶と振返る。隙をあらせず庭に飛び下り摑んで大地へぎやつとのめらせ足下に踏まへ。詞ヤアラ心得ぬ賓人め。荷箱の内より大小取出し。奥を目がける氣相いか樣仔細ぞあらん。眞直に白狀せよ。骨を斷つても言はせにや置かぬと。地挫付くれば吠面ながら。詞ヤア下郎とは丟長し。汝等が祟まへかしづく。千鳥の前が兄黑塚鬼藏人。繁氏が爲には小舅。主同然の某ぞ。土足にかける罰當りめと。地いふに驚く色目を隱し。詞シテ其兄が何故に。斬込んで誰に敵對。目指す相手の名は何と。ヲ、その目當は加藤左衞門。繁氏が首取つて。地知行にすると刎返すを。起しも立てず扱こそと。刀の提緒手ばしかく後手に括り上げ。定めて一味の族もあるべし。密に詮議と引立つれば。奥より來る女中の足音。見付けられては詮議の妨げ。如何はせんと取つ措いつ思案の屏開いて幸ひ暫しの獄屋。神は見通し許させ給へと社の内へ。無體に押込み鰕錠しつかとおろし置き。オクリさあらぬべ體にて入りにけり。フシ妹脊の中に。囮りし石動丸の御母君。長地牧の方とは申せども子持ちと見えぬ御形。花見座敷へ出て給へば。跡に續いて千鳥の前。大内山の木隱れより移し植ゑたる花なれど。さすが妾と本妻の。フシ禮儀は戀の品定め。詞ナウ千鳥樣。連合ひ左衞門繁氏樣。七年あまり

禁裡の勤番首尾よう勤めておしまひなれば。是からお國で御休息。永々の在京に。夜のお殿の伽もなく。お淋しからんと案ぜしに。　地色自らになり代り殿の心を慰むる。そもじ様があるとの噂。國許で聞く其嬉しさ。とんと心が落着いてゆる〳〵上りし今度のお迎ひ。けふは歸國のお願ひに。禁裡様へお上りなれば。お暇が出るや否や。　詞こなた様を國へ伴ひ。たアんとお禮を申さにやならぬと。　地色奥底もなき御挨拶　詞是はまあ有難いお詞。今更申せば何とやら。言譯がましく悪けれども。　地色數ならぬ身の殿様に添伏し。御臺様のお目にかゝらばお叱りもあらんかと。思ひの外な御憐み。さう結構におつしやつてはお返事もなりにくし。　詞千鳥よどうせい斯うせいと腰元衆同然に。　地御意なされて下さりませ。　詞ハアテわつけもない。大事の殿御を半分づつ。いとしぼがつて貰ふもの。如ずにしてよいものか。其代りに此上外で殿様の。悪性があるならば。二人して言はうぞえ。そりやお氣遣ひ遊ばすな。お前にお世話はかけませぬ。　地御名代と二人前私が番を致しませう。ヲヽそれ〳〵と領き合ふ　フシ仲よき魚と水入らず。　地色腰元どもは手をざをにお氣慰みと持運ぶ。雙六盤や歌がるた野風爐提重茶辨當。取散せしはお座敷を野山に移す花見酒。フシ數々めぐる。盃に御臺所與じ給ひ。　詞おつ付け殿様お歸りあらん。お目にかけるも二人が御馳走。アノ櫻を題にして腰折れなりと一首宛。　地色短册をつけまいかこりやようお氣が付きました及ばずながら我もと。雙六盤を眞中へ。脇息に押直させ二人が臂をかけまくも。かしこき國の和歌の道　フシ案じ入つたる御酒機嫌。　地色心隔てぬ中々は。何に遠慮もなぎさ漕ぐ海士の小舟や。とろ〳〵目。すや〳〵寢入り給ひければ。腰元どもは囁き合ひ仲のよい同士打解けて。　詞テモ快う御寢なつた。お目のあくまでこちらも暢氣と。　地座敷の障子そつとさし。　フシ皆々一間に入りにける。　地色程なく左衞門・蘩氏卿歸館を告げる奥使。跡よりしづ〳〵入り給へば。監物太郎出で迎ひ是はしたり。　詞殿様のお歸りを。奥方には御存じないかと。　地一間にかゝればさなせさなせそ。　詞餘念なく寢入りし體。互に妬む色もなく。睦まじきこそ滿足なれど。　地悦び給へば頭を下げ。　詞何様御意の如く嫉妬のあるは婦人の常。その氣遣ひなき

御二方。斯くまで御仲よろしき事我々までの大慶と。地申し上ぐれば繁氏卿。傍なる盃取上げ給ひ。詞禁裡表の首尾もよく。歸國の暇を賜りし悦び。地我も彼等が花見の相伴二人が風情を看にて。花の本の一献。酌せよと宣へば。ハヽツト銚子を押取り。注ぎかけたりし不老不死。藥の水の滴りと一つ受げさせ給ふ折ふし。雲心なく吹く風の盛りを散らす一嵐。受持ち給ふ フシ盃へ蕾一房落ちにける。地色繁氏つく〳〵うち詠め。詞散ればこそ。いとゞ櫻は日出たけれとは詠みたれども。雨に萎み風にもまれ。盛りの散るは科ならず。いまだ時にも逢はぬ此蕾。盃の中へ散つた る事。地色是こそは人界の儚なき教への老少不定。老いたるが先立つとも。フシ若きが跡に殘るとも。地色定め難きは人の命。忘るまじきは後生の道と。文武に猛き繁氏の無常を觀ずる悟道の一言打ちしをれたる。御有樣。監物太郎も尤もと共に悟りは開けども。わざと詞に勵みを付け。詞コハいひ甲斐なき御迷ひ。釋迦といふ賣僧頭。さまゞ〳〵の僞りを書散らし。一文不知の姥嘆をたらさん爲の一切經。譬へて申さば盜賊を捕へ。殺生なりとて助け歸さば國家の憂となる道理。地アタ忌はしき後生の道と。心に思はぬ雜言に佛法誹るも諫めの忠言。心を感じて打頷き。誠に汝がいふ通り弓馬の家に生れながら。假にも無常に引かされては武の道は立ち難し。詞この後ふつつと思ふまじさりながら。よしなき事に心も滅入り何とやら物淋しゝ。地次の間にて檢校に琴を彈かせよ。御臺や千鳥に目を覺させ我は是にて慰まん。フシ早とく〳〵と宣へば。地色只當然の御戯れ強ひて諫めに及ばずと。オクリ御前を。へ立つて フシ入りにけり。詞ホヽいつになき我佛法歸依。武邊に弛もつかんかと案ずるは尤も〳〵。地色イデわつさりと酒宴を催し結ほれし氣を晴らさんと。立寄り給ふ障子の内。コハリ不思議や俄かに物騒がしく。あたりに響き。庭の木草もさわさわと。ナホスフシ風も身に沁むばかりなり。地コハ心得ずと一間の障子。さつと開いて見給へば。餘念なく臥し給ふ二人の黑髮。眞逆樣に蛇の如く。鎌首ぼつ立て喰合ふ有樣。さしもの繁氏怖氣立ち フシ呆れて。詞もなかりしが。地色ハツア恐るべし〳〵。詞外面似菩薩內心如夜叉と說かれたる。佛の戒め目のあたり。地顏に白粉丹花の唇。粧ひ飾りて

菩薩の如く。互に妬む顔もせず。打見には仲よき體。心の底に邪鬼執念。絶えせぬ證據をおのれと顯はし。かく淺ましき體たらく。忌はしや穢らはしや。詞妻子は地獄の家土産と。說き示されしに。フシ疑ひなし。地色花の蕾の散つたるに思ひ較べて觀ずれば。是ぞよき菩提の種。家國榮華も望みなし。迷ふが故に三界の。火宅にフシ心を苦しめり。地色悟れば十方空ならずやと。今迄心の滅入し上。いや增さりたる發起心オクリ烏帽子へ狩衣脱ぎ捨て給ひ。差添拔いて髻を。ふつつと切つたる輪廻の絆。硯引寄せ書置を。スエテ認め給ふ其内に。奥座敷には檢校が。琴の音色もしをらしく。詞歌の唱歌は聞えねど。彈く爪音は薄雪か。薄き契りも過去の因緣。地必ず心殘すなとこまゞ〳〵筆に書盡くし。御髻に烏帽子裝束。書置添へて彼處に置き。裏門より悄々と立出では出てながら。さすが恩愛捨て難く。振返つて涙にくれ。二人が夢覺め斯くと知らば。さぞ歎くらん不便やと。見やり給へば蛇形の黑髮。コハリ猶も盛んに挑合ふ執着心に ナホス愛想もつき。身顫ひ立てゝ足早に。フシ行方知れずになり給ふ。地色斯くとも知らず監物太郎。立出づれば一間の騷動。見れば件の怪しき姿。驚きながら走り寄り。用捨もなく喰合ふ黑髮。差添拔いて斬放せば。二人もびつくり起上り。顏を見合はせ一時にフシ吐息を。ほつとつき給ふ。地色監物太郎あたりを見廻し。我が君はましまさず。御烏帽子狩衣の。脱捨てあるこそ心得ねと。立寄り見れば御髻に。一通添へて殘されしは。はや御遁世か情なやと。驚き騷ぐに二人も立寄り。詞ヤア殿樣は遁世とや。地何故の御出家ぞと。あまりの事に興さめて。泣くも泣かれずうろ〳〵と。フシ共にうろたへおはします。地監物やう〳〵心を鎭め。詞ヲヽ驚き給ふは道理。先程禁裡より御歸館の節。いつに勝れし御機嫌。あれなる櫻の本にて御酒宴の折から。御盃へ花の蕾散つたるとて。無明の悟りを開き給ひ。地色さも心細く御意なされしを。打消しては置いたれども。詞御兩人の髮逆立ち。蛇の如くになつて喰合ひしを。御覽あつての發心かと。地歎くに御臺千鳥の前。亂れし髮に心付き。現ともなく夢ともなく。咬つつ咬はれつ爭ひし。互ひの覺え一時にスエテどうど。轉びて泣沈みフシ前後。不覺に見えけるが。地アヽ恥かしきは人

の心。此度都見物がてら御迎ひに上りしが。千鳥殿と殿樣との睦まじさ。見るよりも妬ましく。胸もかき裂く腹立を。じつと堪へて上面には。美しうつき合へども。寢た間に本心顯はして。淺ましき有樣を。お目にかけしか悲しやなせめては國に殘りたる。石動が大人しく生立つ迄。思ひとまりて給はれかし。呼び止めてくれぬかと歎き給へば。フシ千鳥も涙。地けはひ化粧紅鐵漿より。髮形ぞと艶付けて。かた笄よ吹上よと。結ひ揃へしは殿樣に。見限られまい爲ばかり。其髮が蛇とならば。身體は鬼にもなりかねまい。見捨て給ふも道理ぞや。御出家も皆私が業。イヤ遁世をさせませし。科人は自らよ。イヽエ私が。ハテわしがと。涙みなぎる繰言に。思案半ばの監物も。フシ袴の襠に淵をなす。地御臺所は涙を押さへ。イヤ〳〵泣いては濟まぬ事。まだ程遠くはござるまい。追つかけて止めんと。千鳥諸共立上るを。詞ヤレ待ち給へと押止め。とくより某左樣は存ずれども。いか程お止め申すとも最早止まり給ふまじ。地色先づは殘し置かれたる御書置を見給へと。一通を差出せば。是非もなく〳〵取上げる。涙に聲を震はれてしどろもどろの讀みくせを。千鳥も共に差覗けば。文詞涙ながら書殘す一通。一つ。われ弓箭の家に生れ。なに暗からぬ身なれども。家國を捨て妻子を捨て。世も捨人の沙門となるは。前世未生の佛緣ならん。思ひ測らず降つて湧いたる遁世を。胸狹き女心に。淺ましき姿を見せける故と。嘸かし歎きの餘り。共に姿も變へまく思ふらん。フシさにあらず。地色妻子珍寶不隨者とあれば。死出の旅路は別れ〳〵。伴へる人もなく。隨ふ者もなく候。詞とは言ひながら。只忘れがたきは石動丸。やう〳〵二歲の時國に殘し。それより又七年餘り。顏も見ず候へば。さぞ成人も致し。大人しくもなりつらんと。思へばいとゞ懷かしく。忘るゝ事は是なく候。石動丸を傅立て。加藤の跡目を繼がせてたべ。父が此身になり候へば。若しや流浪も致さんかと。是のみいかう案じ候。必ず〳〵歎きにくれ。地忰が事を忘れぬやう。返す〴〵も賴入り候。千鳥へも一通を。殘さんと思ひしかど。詞心せかれて候まゝ。此文を一所に詠め。牧の方に力を付けてくれよかし。言ひたき事は山々なれども。涙に筆も廻りかね。ちり〳〵もし。地讀みも終らず三人は。スヱテわつ

とばかりに。泣沈む。地色監物太郎涙をおさへ。殿の事は歎きても詮なき事。一大事はお家の跡目。若君の御身の上。詞殊更隣國には。大内之助義弘といふ佞人あれば。君御遁世なされし事を押包み。幸ひ歸國を許されし砌。いつもの如く繁氏卿御歸國と世上へ見せかけ。御臺樣に我君の裝束を召させ。一刻も早く國許へ御供して下るべし。地跡目の願ひはお國から。急いで御用意遊ばせと。せき立つ詞に歎きを止め。兎角よきにと烏帽子狩衣。取上げて立ち給へば。千鳥の前袖を控へ。詞私もお國迄お供は致す身なれども。お前は石勤丸樣といふ若君あれば。是に越したる形見はなし。地色せめて朝夕御身に添ひし。此烏帽子狩衣を。妾に下し給はれと。取付くを監物太郎。詞御尤もには存ずれども。たつた今お聞きの通り。御跡目相續の力と致す烏帽子狩衣。此方には進ぜにくし。ハテ何をがな。ヲそれよ〳〵。地究竟一の形見ありと。社の鍵を取出し。詞是はあれなる祠の鍵。社の内には其許の。大切になさる形見あり。扉を開いて取り給へ。併し妾をよく得心あれ其形見の成行にて。地お國へお供は叶はずと。鍵投出し謎をかけ。御臺所を誘ひて　オクリ奥深へくこそ入りにけれ。千鳥は一旬の判じ物御形見の成行にて。お國へ行く事ならぬとは。どうやら物のある言ひ方。譯こそあらんと庭に下り。社の傍へ立寄つて何かは知らず開いて見んと。錠前あくれば待兼ねしと。飛んで出でたる鬼藏人。ヤレ怖やと逃退きしが。顏を詠めてヤア兄樣か何故妾に。縛られたはどうした科と。驚きながら親は泣寄り。縛め解けば身構へし物をもいはず駈出すを。コレ待つた藏人殿。詞監物太郎が一言に。思ひ合はして思案をすれば。どうでも樣子があるわいの。ヲ、いうて聞かさう某は。大内之助義弘殿に賴まれ。加藤左衞門繁氏が首を取り。出世の種にするわやい。地こゝ放せと振切るを。駈塞がつて待つた〳〵。詞それで何にも樣子が知れた。それなら矢張り縛つて置こもの。地こなたの樣な惡人と。一所でないといふ證據。御臺樣や監物殿への言譯と。走寄つて藏人が差添拔取り。手早く眞向斬下ぐれば。南無三寶と拔合せ。妾を最後と戰ふ太刀音。地色監物太郎は小蔭に隱れ。それと見ながら詞もかけず。庭には兄弟修羅の巷火花を散らして。三巴へ斬結ぶ。地鬼藏人は油斷にて。初

太刀に受けし眉間の深疵。眼も眩み滅多斬り。こなたも手弱き女の手業。數ケ所の疵によろぼひながら。難なくおつ伏せ　フシ乘つかゝり。　地色念力通す止めの刀。監物太郎庭に飛びおり。詞ヲヽ健氣なり千鳥樣。御心の操顯はれ。疑ひは晴れたれども。　地此深手ではもう叶はぬ。心はいかにと勞はれば。苦しげに起直り。詞自らとても殿樣の。お情受けし者なるに。樣子によつてお國へは。叶はぬとありし時。酷い仕方と恨みしが。　地此しだらでは疑ひの。かゝるは道理わしが因果と。諦めて居ますれども。兄妹の惡心故。おのづと殿樣に御緣が切れる。是ばかりが黄泉の障りと。血汐に染みし五體を投げ　スエテ泣く聲。奥へ聞えてや　フシ一間の障子。押開き。御臺は烏帽子狩衣を召され。悠々と立出で給ひ。詞我こそ假の加藤繁氏。千鳥の前が誠を感じ。二世も三世も變らぬ契りと。　地の給へば手を合はせ。嬉しき今のお詞は。我が君のお詞より。忝さは百倍と。につと笑ふが置土産。　フシ此世の緣は切れにけり。　地色いとしやなうと御臺の歎き。泣いて歸らぬ愛別離苦　オクリいざさせ。給へと引立てゝ。頃は薄暮よき時分と。せけばせかるる牧の方。力なく〳〵　フシ立ち給ふ形見は跡に心を殘す。着せし人は代るとも變らぬ烏帽子狩衣。假の浮世に迷はじと。悟り〳〵て出てたる主は。直ぐに金色菩薩の位。歎き給ふな歎かじと。悟れば果敢なき花の宴散。りにし姿を殘し置き本國。にこそ立歸る

第　三

地富んで奢らず貧しうして貪らぬは未可なり。富貴にして禮を知り貧しうして樂しめとは。弟子に示せし孔子の詞。大内之助義弘威勢九州に蔓り。自ら武運を朝日にたくらべ横雲將軍と尊號し。人も許さぬ高胡床浮べる雲の上見ぬ鷲。明日は我が身も知らぬ日の。　フシ筑紫の御殿と時めきける。　地色伺候の諸武士も自から伸上つたる大名氣質。中にも近習の關口隼人御前に進出で。詞豫て仰せ渡されし通り。近國の大名より家々に傳はりし重寶。今日獻上致す

筈。則ち寶見分の役は多々羅新洞左衞門と承る。それにつき彼が娘。お國に稀なる美人なれども。いかなる事か終に男の肌觸れず。生れのまゝなる生娘と諸家中の風聞故。御手廻りの召使にと存じ。上意と申してお次まで。地呼寄せ置き候らひしが御慰みに御覽もやと。何がな御意に入らざる追從。フシお髭の塵を取りかける。地色義弘寛々と打頷き。詞勅諚と僞り諸國の寶を集むるは某が謀叛一味の證。連判狀も古めかしく。氣をかへて人質の代りにする。家々の寶。まだ請取るには時刻も早し。其間にかの娘ちよと面を見んそれ〳〵と。地仰せに斯くといひ次げば。オクリやがて〳〵御前に立出づる。地色世に拗ねて。フシ男選みに。年長けし。地色新洞左衞門が娘ゆふしでは。長地つひに殿御の肌知らぬおぼこと見えぬ洒落姿。髮の結目に挿したるは。梅花にあらぬ。フシ白羽の鏑矢。地色弉ならで響か何の御用でお召しぞと。案じる内も面はゆく。お書院近く。フシ坐しにけり。地色横雲將軍遥に見やりゆふしでとはお事よな。詞ハレ見事。よい器量ノ。汝が親の新洞左衞門忠と義とに固まりし心より。頑固に育てられ。麻につる蓬とてそち迄が身持ちも堅く。一度も男に肌觸れぬと聞き及ぶ。器量といひ風俗まであつたらしき日陰の花。地色殊更男選みとあれば疑ひもなき手入らずの大無垢。水揚はこの義弘今宵から抱いて寢ると。ほやりと笑ふしほの目は。フシ仁王の變する如くなり。地色ハツト思へどゆふしではわざと額を疊に付け。詞私風情の賤しき女お寢間のお伽致せよとは有難い事なれども。御臺樣の思召し一家中へ聞えても女旱は行くまいし。家來の娘をわつけもないと。我が君を笑はせますも如何此儀は御免なされませ。地ほんに誓文殿樣を微塵も嫌ひは致しませぬ。慮外も厭はずつべこべとお詞背くも君が爲と。辭儀する詞の控へ綱。フシ切れもやせんと案じ居る。詞ホヽウ此義弘が言出すこと二言と詞を返す者恐らくは覺えず。女に稀なる大膽者出來したりさりながら。一天下の主となる某十二人迄は女房持つても苦しからず。否でも應でも妾にすると。地深く魅入れし鰐の口。遁れるだけと手をつかへ。詞冥加に餘る御意なれども。私はちと譯あつて一生男に肌觸れて。身を穢す事ならぬといふ。申譯は頭にさしたる白羽の鏑矢。細かな

樣子は父上に。地お尋ねあれば知る事と。いふに差出る關口隼人。詞ハアゆふして殿悪い合點。殿樣に惚れられるは此方の爲に福德の三年目忝いとお請け申すが上分別。親御も浮み上る事。其頭に挿いてゐる白羽の矢が邪魔になり。地仰向に寢る勝手が悪くばデエ拔いて進ぜんと。立寄るをむつとせき上げこりや何しやると突飛ばし。詞親新洞左衞門が御前に居ねば高なしの我儘。男持たぬはどういふ譯やら仔細も知らず。親迄が浮み上るイヤ果報ぢやの福德のと慾に穢れた土根性。そんなむさい女子ぢやと思やつたら當が違ふアヽ慮外ながら。サア手は愚そなたの伸びた鼻毛の先でも障へて見や。地赦しはせぬと膝立直し睨み詰めたる理窟詰め。言込められてしがなの隼人。手持　フシ無沙汰に尻込みす。地義弘居丈高になり小ざかしき女めと。肩先掴んで引摺り寄せ。詞女郎の餓鬼は十二三から男を見ればびろ〳〵と前後を見る當代。地察する所内證に隱し男を拵へ置き。其男への心中立。詞外の矢先は通さぬといふ心で。起請の代りに此鏑矢挿して居るに違ひはせまいと。地矢を掻抛つて引起し。サア不義者めが名をぬかせと。責問はれてもゆふしではもとより覺え涙聲。詞コハ無體なる御尋ね私も木竹の身ではなし。地惚れてくれる殿御があれば欲しうなうて何とせう。持つに持たれぬ譯あつて背丈伸びた此年まで。人の數にも入らぬ身を不便なともおつしやれず。酷いお主の心やなさら〳〵不義の男はなし。疑ひ晴れて給はれと。身を悔みたる恨み泣き。フシ涙。片手に詫びければ。詞ヤアまだ男めを庇ひをる。よし〳〵言はせ樣ありと。地口には言へどさすがは戀。目顏で嚇し立つたり居たり。身悶えすればお次より。ヤレ待ち給へと聲かけて。立出づるは新洞左衞門顰返りし天の邪鬼。隼人はお座に堪り兼ね。詞老人の御苦勞に悪い所へよう御出で。地それにゆるりとお遊びと言捨てこそ〳〵。フシ逃げて入る。地娘を引退けどつかと坐し。詞不義の相手が聞きたくば某が申上げん。娘が隱し男は忝くも我朝の神の司。天照皇太神宮。何と肝が潰れますか。したが斯うばかりでは合點行くまい。コレ殿耳を浚へてよう聞かしやれ。此お家大内の御先祖伊勢兩宮を當國へ御勸請なされ。其社より一人づつお座子を取り給ふ。印には家の棟へ不思議に白羽の鏑矢立

つ。其役を勤めた我が娘。一旦神に仕へし女一生男を持たすまいと。誓ひの爲に神明の鏑矢を頭にさゝせて不淨を拂はす。地それを無體に拔取つて妾にするの足かけのと。髯をかぶる御合點か。詞其上これ迄頤のかいだるい程諫めても。聞入れのない謀叛の企。今となつて意見せぬは。所詮いうても得心は召さるまい。ハテ毒食はゞ皿ねぶれと諦めてする率公。地ろくだまに望みも達せず榮耀らしい妾狂ひ。まだ早い。置き召されと。病犬の嚙み附く如く。只一口にわんとばかり。フシ膠もしやしやりもなかりけり。地色性急なる大內之助。堪へ兼ねてすつくと立ち。ゆふしでを宙に引提げ元の所へどうと投据ゑ。詞扨はいよ〳〵推量の通り。親め共に呑込んで內證に男があるな。我が心に從はぬ腹癒。眞二つにぶち放し。其男めに鼻明かせんと。地大太刀するりと拔き放せば。わる怯れもせず押直り。父まで深き御疑ひ。曇りなき身は天道が正直。お手にかゝるが申譯と合掌したる健氣さを。見やりもせぬ片意地親爺。サア今こそと義弘は。父が顏を差覗けばびつくともせぬいがみ面。サア〳〵〳〵と二度三度。嚇しの刄を振上げ〳〵。閃かしてもきよろりが味噌。詞テモ扨もしぶとい奴等。エヽ是非もなし是迄と。地既に危き太刀の下ナウ待つてたべ暫くと。大內の御臺走り出で。詞重々のお腹立ち御尤もとは言ひながら。地戀ばつかりは萬押しにいふ程埒の明かぬもの。自らにお任せあらば何とぞ勸めて今日の內。お前の心に靡きやる樣私が世話を致しませうと。すかし宥める物腰に。フシ貞女のしるし顯はせり。地戀は曲者鬼にも涙。詞情强きどち女郎ぶち殺してしまはんとは思へども。なれば又拾ひ物。少しの間お身に預ける返事が遲いと赦さぬと。地詞の弛みに御臺は心得たつた今よいお返事を。お氣遣ひ遊ばすなとゆふしでを引立てゝ。尾を踏む心地虎の間へ。フシ伴ひ入らせ給ひけり。地色跡には主從物をもいはず。あなたは澁面こなたは工面。睨み合うて居る所へ。國々の諸侯より寶を持參と呼ばはる聲。俄かに繕ふ大將の衣紋美々しく座を占めて。待つ間程なく入り來る。靑貝の卓恭しく。目八分に差上げて二つ並べし珊瑚の枕。是は菊地の陶全姜が寢た間も放さぬ重寶なれども。勅諚とあれば力なく。持參致し候と　フシ廣庇に押直す。地次は豐後の

友方大學。水晶餘を臺に据ゑ。この簾は其昔。晉の國より渡りし寶。庭に掛くれば。　コハリ風を生じ。自然と雨を降らしつゝ。暑氣の時分は。　ナホス冷やりと西瓜もどき夕立もどきと　フシ差上ぐる。フシさて其次は肥前の國。海月式部が重寶に。白龍石といふ硯。墨する度に硯より。おのれと水を湧き出す。不性者には第一の。寶なりとぞ言ひ上ぐる。その外松浦五島の一族。筑紫表の國主城主。皆家々に傳はりし。名物寶を臺に据ゑ。フシ廣緣。狹しと並ぶれば。　地色見分の役人は新洞左衞門。腹は立てども其日の役目不承無性に見改め。いづれも寶に相違なし。詞誰かある此品々御藏の内へ納めよと。　地呼ばはれば伺候の武士てんでに捧げ入る體に。先づは首尾よう納まりしと。諸國の城主も安堵の胸　オクリ皆々〳〵旅宿に。　フシ立歸る。　地色遙かにさがつて筑前の城主繁氏の執權。物に騷がぬ監物太郎寶も持たで悠々と。　フシ白洲の庭に入り來るを。　地義弘つく〴〵打守り。詞九州の大名より殘らず寶を差上げしに。加藤の家より何として寶は送らぬ。宣旨を背くか但しは氣儘か。返答せいときめ付くれば。ちつとも動ぜず御尤もの御不審。勅諚とある上いかで違背の候べき。併し筑前は小國故差上ぐる寶はなしと。　地言ひも切らせずさうは言はせぬ。詞大名の家に寶なくて家督の綸目は何を以て規模とする。イヤ我が國は仁義禮智。　地五常を寶として國家を治むる。但し此お國には器財を以て寶とし。君子の教へを寶とはなされぬかと。理窟を詰めて言込むれば。もとより不才の大内之助。　フシ返す詞もなき所を。　地色堪へ兼ねて新洞左衞門目玉を剝出しコリヤ〳〵監物。詞それは唐土臨潼の會に善を以て寶とすと。伍子胥がいひし口眞似食はぬ〳〵。加藤の家には齊國より渡りたる。夜明珠といふ名玉ある筈。　地いま玉女神と神に仰ぎ尊敬する事紛れなし。是非玉を渡さずば大軍を以て押寄せ。家國共に奪ひ取ると退引させぬ手詰めの難題。此場を遁れて分別と無事を繕ふ當座の請合ひ。詞玉女神を夜明珠と御存じなれば力なし。成程寶珠を渡し申さんさりながら。　地年を數へて二十と限り。遂に男と肌觸れず。交合の道を知らぬ女あらば。玉を迎ひに越さるべし。詞若しも年に過不足あるか。一度でも男に肌觸れ。身の穢れたる女の手に携へ持てば。忽ち玉の光を失

ひ石瓦の如くとなる。その割符の合ふ女があらば何時でも玉を渡すに相違はなし。地某は先づお暇と立歸るを待つた待つた。使の女これにありと。走出でたるゆふしでが。御前に向ひ頭を下げ。詞不義の男がある故御心に從はぬとのお腹立ち。地其お疑ひ晴らす爲遂に妹背の道知らず。身を穢さぬといふ申譯このお使を私に。仰付けられて下されとスエテ思ひ入つてぞ願ひけり。地色監物太郎もぎよつとせしがコリヤ女。詞身の穢れぬが定ならばいかにも玉は渡さうが見事寶の檢分するかと。地何がないうて困らす思案。詞ヲヽ氣遣ひすな其檢分は此新洞左衞門。地娘に連立ち行くからは贋物は摑まぬ〳〵。詞シタガやいゆふしで。そちには惚れた人があるこちの身體は淸淨でも餘所から穢れを添ゆるといふもの。ソレ。和郎が思ひ切るとおいやらねば使には行かれまいと。地戀慕の絆を切らせん爲。大内が耳に打て響けを。聞き流して不興顏。返答もなく座を立つて。駈込む向ふへ御臺所立塞がつて申し殿樣。詞女一人に繫がれて大切なる夜光の珠。此度請取り給はずば禁裡表の首尾も如何。地ゆふしでをさつぱりと思ひ切つたる證據を見せ。使を仰付けられよと。彼方此方でせこめられ。當惑したる大内之助何思ひけん。フシ振返り。地色後にかけたる弓押取り件の鏑矢引番ひ。詞命に替へて某が思ひ込んだる戀なれども大望成就の妨げなれば此戀ふつ〳〵思ひ切る。證據の鏑矢受取れと。地切つて放せば松の木に。フシはつしと立つたる有樣を。地色ゆふしで悅び走寄り。矢を拔取つて押戴きこの。お使を仕果せなば。合枕一つで二十迄寢々した事を世上へ言譯け。君の心も晴々とくも。合らぬ女の鑑にせんと。合帶引締める親子の勇み。監物太郎を先に立て。白羽の鏑矢髻にさしかざしてこそ。三重定めなき。フシ世を憂き事に。見限りて。遁世ありし繁氏卿歸國と僞り石動を。跡目に立て丶監物太郎國家を治むる智仁勇。三國名譽の夜光の珠。玉女神と勸請し秋の最中の祭日に。館賑ふばかりなり。地御臺牧の方石動君を伴ひ廣書院に出で給へば。執權監物が女房橋立神事の祝儀申し上げ。詞夫監物太郎大内義弘の招きによつて參られ。御寶の御神事に外れし段お赦しと。地斷り申せば御臺所。詞心よからぬ大内の呼寄せ。我が夫の行方は知れず。石動は幼少な

り。何言ひ越さんも測られず。地色只なつかしきは繁氏卿と。スエテ喞ち給へば石動君。詞母様氣遣ひ遊ばすな。追付け父様の有所を尋ね。私が迎ひに參りますと。地大人しやかには。フシ涙もとまる折からに。地色國一番の濡男その名自然と女之助。兄監物が勘當請け詫びを頼みの奥書院。フシうぢ〳〵として入り來る。地色御臺は何のお心なく珍しや女之助。此程若も尋ねしが何故登城召されぬと。仰せにはつと頭を下げ。詞私儀不行跡ゆゑ兄監物太郎が勘當請け。それなる橋立殿を頼み様々詫ぶれど聞入れなく。是非に及ばず今日は若君様や御前様の。お詞を借る所存。地色恐れながら然るべう頼上げ奉ると。願ひを聞いて御驚き。テモ扨も。堅いそなたが何越度。軍法秘密の論議でもしやつた上の詫かと。尋ね給ふを傍に聞く。橋立は吹出し。詞御臺様のあの人を堅いとはお目違ひ。其柔かさ自墮落さ。軍法論議はさておき。女中論議で家中は大もめ。お上にも御存知の前の内儀お埒殿は。夫監物太郎都より貰ひ歸り。夫婦に致され退引ならぬ女房を。地子持ちになると乳臭いとて離別して。お物師のお縫殿とちん〳〵。それも續かず弓頭の娘おつるを娶り。持つと去なしてお腰元の長門殿。それから仲居お茶の間の。白髮交りも色めいて。そこでは悋氣こゝでは喧嘩。何から起れば女之助。わしが夫ぢや殿御ぢやと。言募つて大騒動。堅い夫が面汚しと勘當せしも無理ならずと。語れば御臺も興さめ顔。若君何の差別なく。詞女之助はいかい苦勞。それから其喧嘩の仕舞。地どうなつたぞと根問ひにほつと行詰り。詞其ソノ跡の儀は。地面目もなき仕合せと。フシ謝り。入りし風情なり。地色御臺もをかしく若氣の至りもあんまり興がる。以後を嗜む心なら共に詫びして得さすべし。幸ひ今日は御玉の祭。玉女神の御前にて金打させん此方へと。立入り給へば有難しと。石動君を御供し。フシ奥をさしてぞ入りにける。地色程なく歸る監物太郎。大内が難題胸に釘打つて變りし思案もなく。廣間へ通れば妻の橋立。義弘よりの呼寄せ。いかなる事ぞ心もとなし。及ばずながらお聞かせと。尋ねればさればの事。詞大内義弘は都の勅と僞り。近國他國の寶を集むる。これ正しく謀叛の下拵へと見抜きし故。我が國には寶なし。仁義禮智信の五字を以て寶とすと。伍子胥

が辯を借つてまんまと言伏せしに。多々羅新洞左衞門といふ奴。夜光の珠の由來を知つて。汝が家に玉女神と崇むるは。齊國より渡りし夜明珠。寶なしとは言はせじと明白の一言。爭ふにも爭はれず。成程その寶あり。併し尋常の者携はる事叶はず。地二十と限つて交合せざる女あらば。受取りに越されよ。男女の別ち知つたる者が手に觸るれば。忽ち玉の光失ふと言傳へを難題に。當惑させんと思ひの外。詞かの新洞めが娘當年二十。まだ是まで不犯にて此役目を乞ひ受け。親子連れにて受取りに來る筈。代々加藤の家の重寶。渡さば家滅亡。厭といはゞ大軍を以て攻來らん。地さすれば御臺若君のお命も危し。兎やせん角やと胸はどうづき。思案があらば言うて見やれと。語るを聞いて女房はほつと溜息つきながら。只此上は贋物を急に拵へ渡さうより。外の事はといふを打消し。詞イヤ〳〵其儀も思ひ付けども。うつかりと受取る新洞左衞門にあらず。地ハテどうがなと大髓の。骨も碎くる一思案。及ばずながら橋立も智慧の袋の棚さがし。暗がり探す如くにて。フシ暫し途方にくれけるが。詞イヤ申し斯樣な時は膝とも談合と申します。幸ひ弟御女之助樣勘當の詫にお出で。地機嫌直され共々に。御相談はといふに暫らく工夫をめぐらし。詞ム何弟の放埒者。奥へ參つてゐるとな。ホヽウよき相談相手。思付きあり女ども。地汝も來れと立上がる。心知らねど橋立も夫の詞を力草。フシ伴ひ一間に入りにける。地色暫らくあつて大内よりお使者と呼ばはる聲につれ。月と雪との眞中に花と眺める後帶。本フシ男選みのゆふしでが。片鉾の濡髮にさいた白羽の鏑矢は。伊達か潛上か風俗もしとやかに立休らひ。誰そ賴まんといひ入るゝ。かゝる相手に相應の。女房選みの女之助。いざお通りといふ内も。思ひ含ます目遣に可愛らしさが身にこたへ。互に顏を見交して。フシ上座へ通れば。地色橋立がやがて出迎ひ頭から。しつぽりむきの挨拶にて。詞是は〳〵女中の御苦勞によこそお出で。自らは監物太郎が女房。橋立と申す者。また是なるは主の弟御。女之助と申して武道は勿論歌の道戀の道。地並ぶ方なき優男子則ち今日の御馳走役。御用あらばあの人へと。猫に鰹の引合せ。いかな釋迦でも精進を。フシ落しても見たき心なり。地色女同士こそ此方もにこやか。

詞テモいかいお心遣ひ。私はゆふしでと申して。まだ人數にも入らぬ女。斯樣な役に參る筈はなけれども。人好みあるお寶物。親新洞左衞門はお次に控へ。マアそちが受取つて來いと不相應な役目を請け。案じ〳〵參りしなり。地事なうお渡し下されと。詞の內より何がさて。詞お渡し申さいで何とせう。夫も只今罷歸り御藏の掃除。暫くお暇が入りませう。ヤ幸ひ今日は御玉の祭。神前へ供へしお御酒頂戴遊ばし。地不淨を淸めお受取り。それ〳〵神酒といふに任せ。對の德利を三寶に。フシ下女が携へ差出す。地色女之助近く差寄り。詞敵を招いて毒酒を盛り。約を變ぜし例もあれば。地毒味致して進上と。御酒を兩方つぎ合はせ土器にたつぷと受け。つゝと乾してゆふしでに。頂戴あれとさしければ。是は御念の入りし事。緣につれたる神の酒。何お疑ひ申さんと一つ受けて呑む酒の。忽ち五臟に沁み渡り。フシ亂れかゝりし。顏の色行儀もくづれ土器を。女之助へ差戻す。サアしてやつたと橋立が。わざと咄も打解けて。詞近頃卒爾な事ながら。頭に挿されし白羽の矢は。地いかなる故ぞと尋ぬれば。是こそ私が殿御を持たぬ申譯。幼き時この白羽家の棟に立ちしより。詞神のお伽のお座子となりしは幸ひ。よい男好いた殿御のある迄は。人目の關の此白羽。片時も放し侍らはず。あはれ此矢を貰ふ氣な。お人があらば遣りたしと。女之助が傍近く。にじり寄りたる亂れ咲き。花ならば折れ。折る人は。フシぬし樣ならでと縋り寄る。地色妻ぞと共に摺寄りて抱付く程に思へど。傍に見て居る兄嫁の。手前を恥ぢて薄紅葉。高をしめたる橋立が傍から焦つてそれそこを。じつと引寄せ引締めて。二世の堅めが是迄の。不儀淫奔の返り花。あだ花ならば御無用と。そやしかくればゆふしでは。詞テモ粹な兄嫁御。惡性男をわしが手で。こなして見せうが下さんすか。仰せに及ばず互の緣づく。したが口先ばかりにて。どうの斯うのは皆浮氣。地誠をいはゞあの一間。其氣がなくば置かんせと。張掛けられてイヤ申し。詞戀は親にもお主にも。見代へてするが女の意地。跡へは寄らぬコレごんせと。地女之助を引立てる是ぞ工の臍落と。思へどどうやら恥かしく尻込みするを橋立が。鬼も賴めば人食はぬ。入らざるお辭儀と無理やりに手早く跡より押遣つて。一間をぴつ

しやり閉すとはや。内陣ひつそと鎭まれば。繻子の帶なるばかりにてたり見廻して。女之助の放埒も禍三年時の用。仕果せたりと思ふ所へ。多々羅新洞左衞門。生れ付いたる氣は苛ち。待ち久しくて次の間より歩み出て。コレ女中。詞娘は寶珠を受取つたか。まだかどうぢやぞ聞いておくりやれ。地べら〳〵何してをる事ぞと。膨れ返つた髭面を。引延ばさんと橋立が。やがて床几を參らせて。誰そ莨盆お茶持て來いと馳走ぶり。詞イヤ茶はたべぬ莨は嫌ひ。減多に馳走召されても。受取る物に遠慮はないぞ。地床几は役目恩には着ぬと。腰打ちかくる其内にも。橋立は一間の首尾。いかゞと思ひ立つつ居つ狼狽へ廻るをコレサ女中。詞きよろきよろと何しめさる。待兼ねて烏帽子首。強ばり申すと言うてくれめせ。但しは直に行かうかと。地立上ればアヽ是申し。詞今が祭の最中。ナニ祭とは。イエイナ。地かの夜光の珠のお祭と紛らかし。隙取る方便に傍へ寄り。詞お家の祭は先づ最初が鼻高。地其鼻の長さが三間半。男にしたら廢者。次が御輿と提灯。その提灯が餅搗いて。事の埒があかぬかと。いかう私は案じます。詞アヽこれ。神事の咄聞きには參らぬ。御玉ばかりを受取るに。斯樣の隙入り合點行かずと。地睨み廻せばヲけうと。詞輕はずみに何ぞいな。玉といふに愚はなく。唐土には卞和が璧。我朝にては驪龍の玉。伊勢の國にはお杉とお玉。飛んだは人魂怖いは目の玉。地下女の玉でも輕々しう。受取らるゝものかいな。マヽお前はお幾つで。お名は何と申します。詞ハテ面倒な事を尋ねる。名は新洞左衞門年は六十。したり。ナンヂヤ。テモ扨も〳〵扨も。さつても若いお顏の。ア若うござる。お耳も聞えお目もよいかえ。耳も目もよござるてや。お齒はえ。それもよいてや。サア其よい内から人は養生。折々疝氣も出ようがな。ハテ出ようとまゝさ。イエ〳〵さう氣を苛つがいかいお毒。地それ〳〵頭によつぽど白髮デエ。拔いて上げましよと立寄れば。突飛ばし。詞エ七面倒な女めと。地片方に立つて大聲上げ。詞ヤア〳〵娘。夜光の珠を受取りしか。何してをるぞとつかうどに。地呼ばはる聲の響きてや。心靜かに寶塔を。携へ出づるゆふしてが。跡に續いて女之助。出づるや否や拜敬し。詞忝くも寶塔

オクリ物靜へかにぞなりにける。地色橋立あ

の。内に籠めたる御玉は。闇を照らす事。日輪よりも明かなる故。地夜光の珠と　フシ名付けたり。地斯程貴き御寶を。輕々しく受取られし。詞ゆふして殿は仕合せと挨拶すれば。皆是お前のお世話故と。表向なる互の辭儀。新洞左衞門笑壺に入り。地ホヲ、娘。寶を異議なく受取つたか。出來した〳〵。しかし某檢分の役。改める爲拜禮せん。地何れも共に拜まれよと。いふに隨ひ女之助。橋立共に頭を下げて。フシはつとばかりに敬ひ居る。地色ゆふして心に信を取り。どなたも玉の御威德。拜み給へと寶塔を。開き見すればコハいかに。眞黑くろと黑玉の。墨をつくねし如くにて。是はとばかりゆふして親子。女之助も橋立も。共に呆れ顏付きにて。フシ暫し。詞もなかりしが。詞新洞怒つて。ヤア大盜人の監物太郎。改めずんば贋物を持たして歸す工よな。地イデ寶藏へ踏込み摑んで來んと。駈行く向ふをさつと明け。内より飛出る監物太郎。贋をくろめの白々しく。詞コリヤ〳〵新洞。先達ていふ如く不淨の女が受取らば。玉の光を失ふといひしは爰ぞ。其女に詮議がかゝつたそこ退けと。地打つて變りし詮議の裏釘。いがみかゝつて橋立が。詞コレゆふして殿。身に覺えあるならば。有樣に白狀あれ。地色一間の内で不義がましい。みだりな事はなかりしかと。まざ〳〵しげに問掛けられ。何と言譯ゆふしてが。すべきやうなく髮にさす。白羽の矢をば拔くとはや。矢の根を咽に突立つる。是はと驚く人々より半狂亂の新洞左衞門。抱きかゝへてコリヤ娘。詞わりや何故に自害する。言譯なくばない樣の。思案もあらうに情ない。地大事の娘を殺すかと。さしもに猛き武士の。子故の闇に目も眩み。スエテどうど。坐りて泣居たり。地今を限りのゆふしてが。涙片手にナウ恥かしや。詞自らは此館へ來るよりも。さるお人をば思ひ初め。情の道に迷へども。大事の役目と心の駒。地繫ぎ留めしを情なや。御内室の饗應酒。詞あれなる御酒を飲むよりも。不思議や五臟に沁み渡り。大事を忘れ何のその。地儘よの上にはり持たされ。つい下紐を解きそめて。是非なく身をば。フシ穢せしぞや。地色言譯ならぬ淫奔を。詮議に逢うて恥かいて。斯くなり行くは神の罰。神明怒りの鏑矢に。射殺さるゝと覺悟して。死ぬる心の悲しさを。推量してと泣く涙。袖に餘れば血に

染みて　フシ見る目も。いとゞ哀れなり。　地色様子を聞いて新洞左衞門。すつくと立つて走寄り。娘が言ひし御酒德利兩手に掴んで。　詞ヤアラ心得ず。尤も若氣と言ひながら。左程亂るゝ娘にあらず。仔細は此中顯さんと。　地縁の榧に打付け〳〵。打割る中より守宮のつがひ。現れ出づればしつかと捕へ。扨こそ〳〵。　詞唐土張華が博物志に。交合の守宮を引分け。酒に浸して其氣を飲ませば。忽ち女の心亂すと書き現はす。其理を知つて娘に飲ませ。性根を亂しいたづらさせ。身が穢れた故光失せしと。科をこつちへ塗付けて。贋物渡す下拵へ。　地さて巧んだり拵へたり。憎さも憎し不義の相手。是へ出せずだ〳〵に。試して胸を晴らさんと。三寸俎板見拔きし兩眼。睨みつけてぞ　フシ詰寄する。　地色ちつとも臆せず女之助。其不義の相手は某。御存分と押直る。ヲヽよき覺悟觀念と。振上ぐる劍の陰。ナウ是待つてとゆふしてが。苦しむ體に氣も弱り。心も折れて詮方も　スヱ泣くより外の事ぞなき。苦しき中にも親の顏。じろ〳〵と見ておいとしや。親一人子一人の。私に別るゝお前の心。悲しい上にお腹も立たう。　フシさりながら。　地色たとへ守宮の業ならずと。ちよつと見るから思ひそめ。心が先へ穢れたもの。　詞帶紐解かずと御寶の。光失せいで何とせう。　地假の契りも二世の緣。枕交はせば我が殿御。聟は子といふ世の習慣。私が死んだ跡にても。形見と思ひ懇に。おいとしがつて下さんせ。おぬし樣も父上を。親と思うて折ふしの。訪ひ音信を頼みます。親に先立つ我が心。推量して可愛やと。思うて一言未來まで。夫婦と言うて下されと　フシしやくり。上げたる哀れさを。地色見るに身に沁む橋立が。せめての事と介抱し。萬事を胸で諦めて。詞に出ねど心には。さぞ自らが憎からう。言譯するにもしられぬ品。皆これ前世の約束と。思ひ諦め給はれと。歎けば共に女之助。　詞是迄盡くせし惡性の。止めとなつた今の悲しみ。未來は扨おき後々萬劫。契りは變らじ夫婦ぞと。　地いふ壁耳に經陀羅尼。物も得いはず嬉しげに。合はす兩手が暇乞ひあへなく息は絶えにけり。わつと泣き出す新洞左衞門地鞴蹈んで。ヘエヽしなしたり情なや。　詞わが片意地な心から。一生夫は持たさぬと。言うたを誠と思ひ詰め。あへない最期を遂げけるよ。未來で夫婦

と悦べども。悲しむ親が此世からそれが見えるかたはけ者。思ひ出す事ばつかりを。言うて死なずと便りなき。地此身を早う迎うてくれ。六十越して子に離れ。何を頼みの娑婆世界。情なの我が身や。不便な娘の最期やと。しやくり上げたる一徹涙。堤も切れて大川に。フシ泥の淵なす如くなり。地色共に哀れと人々の歎きの内に監物太郎。かの寶塔を目通りに据ゑ。女之助を引直し。詞汝この如く。光を失ひし不義の相手。地討つて渡す覺悟せよ。サア新洞受取られよといふ聲に。涙拂うてすつくと立ち。詞ヤア人そばへすな其手は喰はぬ。義理立てせば助けうと思ふかいつかないつかな。眼前娘の敵人手は頼まず。我が手にかけて眞二つ。地恨みを晴らすそこ退けと。飛びかゝつて拔打ちにはつしと斬つたは件の名玉。是はとばかり人々は呆れて。フシ詞もなかりしが。地色女之助聲をかけ。手が廻りしか新洞左衞門。せかれずともサア首と。差付くれども目に懸けず。切割りし玉引掴み。詞おのれ陰陽和合を嫌ひ。よう光失うて。娘に自害させたなあ。我が子の敵思ひ知つたか。加藤の家の名玉は。目利の目からは悉皆藍玉。持つて歸り主君に見せ。地恥顯はして腹癒てくれん。必ず跡で其玉は贋物などと爭ふな。詞誠の贋があるならば。石動や御臺に持たせ。早く此家を捨てさせよと。地いひ敎へたる詞の裏。表は忿り心には。せめて娘が手向ともなれよとかける情をば。フシ袖に隱して立歸る。地色折よしと御臺若君。駈出て給へば女之助。詞新洞が詞のはし御雨所の身の上氣遣ひ。幸ひ我が君高野に御座あるとの風聞。それを力にお供せん。地いざさせ給へと勸め立て。伴ひ出づれば監物太郎ヤア待て弟。詞汝生れついて好色者。いまだお若き御臺所。預けやる事覺束なしと。地いふよりやがて守宮を引裂き滴る血を。腕へ塗付け是見給へ兄者人。詞守宮は不義を勸むれども。其血は却つて不義顯はす。唐土秦の始皇三千人の宮女に。不義あらんかと疑ひ深く殘らず臂に是を塗る。不義ある者は忽ちに落ちて跡なくなる例。さるによつて守宮といふ字を。宮女を守るといふ心で。みやもりと書傳ふ。地我が朝にては萬葉集。脫ぐ沓の重なる事のかさならば。守宮のしるし甲斐やなからん。詞沓重なりてさへ印は落ちると詠みし歌。地まして三代相恩の。お主に對して不

忠不義。天命いかでと言はせも立てずヲ、出來した行けと一言が。兄の情の　フシ餞や。　地色御臺若君立別れ高野の。山の峯にある。我が夫諸共歸り來んと。連れ給ひし。　フシ言の葉も。それはまつとし待つ迄は。お名殘り惜しやと橋立が。眺寄るを押隔て。互にさらば。おさらばの。聲を力に忘れ草伴ひ。館を出て給ふ國に。思ひや殘るらん。

第四　道行越後獅子

三下リ鹿踊り來て。是の大門。跳むればエイソレ七里。大もん花でかゞやく。　ナホス花を見捨てゝ。憂き事に　フシ憂きを重ぬる。玉鉾や。繁氏の御臺所。石動丸の御手を引き女之助がお供にて。君は高野にましますと。　本フシそれを力の忍草。笠にはあらぬ越後獅子　オクリ習はぬ。わざに太鼓笛吹くや追風に帆を上げて。國を出船の日和もよく。フシオクリはる〳〵紀の路。加太の浦。あがる朝日に。摺れ違ひ。爰より徒歩の草鞋がけ。沖の鷗におき別れ　小オクリ誰か。松江と聞くからに。辻占よしといそ〳〵傳ひ。　長地跡に心は殘らねど引戻さるゝ砂道は歩めどはかの。　フシ行惱む。げにや世にある身なりせば名所古跡も訪ふべきに今は耳にも目にも見ぬ。小家がちなる軒の端。煙脈〻峯々に霧立ちのぼる。絶間よりほころび出づる山々は。野飼の牛の口を執る草刈り童の月代に。似たぢやないかと高笑ひ似たは化けたか。合狐島。　フシ睫毛濡らせる袖の露。松に殘りし。嵐と共に　オクリ野邊の。草葉も枯れ〳〵にいつも變らぬ冬景色。落葉も霜に埋。　合もれて木の下蔭の淋しきは。在所離れて北島の。渡り急ぎし舟呼ばひ川の流れに水鳥の。羽を伸す音に驚きて。人目防ぎと舞ひ奏で。　スエ櫻木踊の拍子とり　合越後獅子二上リ唄櫻木を。枝にふきかけ門に立て。門の。光で。庭も輝くさ。くら木。北山の櫻の樣なる。殿がな女郎がなと。　ナホス歌ふ聲さへ〻和歌の浦。　フシ爰は寡婦の。かたをなみ。お茶は摘まれど都に紛ふ。所の名さへ。　フシ宇治と呼ぶ。月を慕ふか雨を招くか露盤にあらで懸造。お宿〳〵と招かれて。まだ日は高い先が急ぐと言捨てゝ。　ハヤミ逃げて。のかはの觀世音歩みながらに遙拜

し。鄰を祈る松島や。千代に八千代に。さゞれ岩出を跡になし振返。冷泉カヽり見る。フシ故里は。あれかあそこかあの邊かと。空にしるしの甲斐もなく亂れ。亂れ亂るゝ白雲の。風に誘はれ。半冷鐘の聲。フシはや入相に。程は長田の里續き。菁ひを頼む粉川寺惠みも深き法の友。胸に木札の順禮も。願ふは二世の道知るべ。我々とてもあの世まで。伴ふ主の御在所。尋ね三谷を過ぎ行けば。高野も近し我君に。二上リ唄やがておほつと開くや嬉しさに。道を急いでしやなら。ナホスと紀の川。上にぞ。三重へ月影に。地光を添ふる法の道高野山の繁昌に。つれて蔓る麓の里學文路の宿の賑はしさ。都方より參詣に鄙の道者も打交り。泊りせりあふ旅籠屋の。フシ内證がしき黄昏過ぎ。同じ浮世に。人忍ぶ。地色身はならはしよ旅の空筑前の三人も。宵より爰にかりの宿笠も草鞋もとく〳〵と。寢られぬまゝに御臺所。石動丸の御手を引き障子開いて次の間へ。フシ立出で給へば。地色女之助跡に引添ひ歩み出で。詞誠や人の盛衰は定め難しと申せども。繁氏卿御在國ましまさば。錦の褥に御身を添へ。地隙間の風も防がんに斯く淺ましき旅泊の轉寢。いたはしさよと頭を下ぐれば。共に萎るゝ涙を隱し。我々親子が苦勞より若い其方が心遣ひ。永の旅路を主なればこそ忝いぞや嬉しいぞや。死んでも忘れはしませぬと。フシの給ふ顔の艶やかさ。地色旅疲れでさへアノ御器量。さて美しやと思ふよりふつと目の付く煩惱心。例の持病の好色が穗に現はれて是はしたり。詞改まつたおつしやり様。忠義といふは付けたり。永々の道中をお前様のお供して。何の苦勞に存じましよ。我が君のござると風聞する。高野山へはもう四五里。地明日は慥かにお逢ひなざるる。さぞ明晩はしつぽりと。久々の溜り水人目堤の切れ口を。フシ御用心遊ばせと仕懸けて見たる問藥。おのが病に配劑の加減は常の如くなり。詞マアあの人のつがもない。たとへ夫に逢うたりとも。御出家の御身なれば其樂しみは切れてある。只歎くのは國の騷動。地大内を亡し此若を世に立てる御相談。一先づ國へお供して立歸りたい心の願ひ。もし其上の御得心還俗でもなされたら。ハテ其時はとばかりにて袂こぼるゝ腦には。フシいとゞ思ひや增さるらん。地色媚く詞を付け込むしれ者。じり〳〵と傍に寄り。詞成程おつし

やればそんなもの。しかし一旦浮世を捨て。御出家なされた御主人。何程におつしやるともよもや還俗はなされまい。が又殿様にも無分別。是程奇麗な美しい。うまい盛りの御臺様を捨置き。坊主になるとはどうした御思案。第一きつい不心中。地此間から道中でつく〴〵と存ずるに。ほんにわし等がお前の様な女房を持つたなら戴いてゐる合點。何と談合なされぬかと。言ひしなづつと立寄つて後より抱き締め。何と〳〵頬摺を。フシ髪でするこそうたてけれ。地色御臺は呆れて詞なく振放し飛退きて。詞コリヤ女之助。そちは氣ばし遣うたか。あんまりで物が言はれぬ。石勳丸も聞いてゐるぞよ。國許を出づる時。監物太郎が念に念。誓ひを立てゝ守宮の血。臂にまで塗つたぢやないか。地まだ廿日にもなるならず。それ程の大事を忘れ。人でなしめ畜生めと。やり込め給へば思案して。コリヤ色とりでは行くまいと氣相變へてけら〳〵笑ひ。詞いかにも國を出づる時はさう思うて出たれども。一月足らず夜も晝も。テモよい器量又あるまいと見る度に思ひの種。增さりこそすれ忘られず。も言はか〳〵と堪へ〳〵て言出す今夜。地命がけで惚れた戀。厭とあればお二人を手にかけて拙者も自害。詞オツトあればいつ迄もこつてりのちん〳〵サア。地手短かにお返事と差添を拔放し。大惡無道に一心が坐り切つたる眼つき。フシ天魔の魅入と知られたり。地色石勳君は幼氣に何の頑是も涙聲。死ないで叶はぬ事ならば父様に巡り逢ひ。其後死なうそれ迄は母様もお詫言。女之助も堪忍しやとあどなき詫びも武士氣質。御臺は泣くにも泣かれぬ仕儀燃え立つ胸を押鎭め。詞命にかけて自らをそれ程思ふが誠なら。兎や角もなるべきが。地せめて殿様に巡り逢ふまで。了簡して待つてたもと。の給へばならぬ〳〵。詞是まで騙すが皆其手。そんなあまちや〳〵には嵌らぬ我等。ハテ厭なれば息子殿から殺してのける。子がかはゆくば合點して夜の更けぬ内ほめいてしまを。イヤそれでも。それでもとは厭な氣か。サア〳〵〳〵と。地座敷の内をあなた。こなたと付け廻せば。御臺は足の踏所なく若君をかき抱き。コレ麁相しやんなア、危ない〳〵と。慄ひ〳〵奥の間へ。フシ引外して逃入り給ふを。地どうでも遁さじ返事はと。續いて一間に駈入りしが。こんと一聲釣鐘の音凄まじく鳴響

き。驚かされて見し夢は跡なく。覺めて。三眞旅姿。　地色慈尊院の縁ばなに主從三人笠傾け。前後も知らず臥し給ふ猶も續いて寺々の。鐘鳴る音に女之助。むつくと起きて月影に。四邊を見廻し　詞爰は何處ぢや慈尊院。扨は今のは夢であつたか。ハツア有難や嬉しや〳〵。ホンニ夢ぢや忝しと。　地天を拜し地を拜し。悅び片方に座を占めて。エ、我ながら情なき根性かな。明暮御臺を見る度にさりとは惜しいお姿。お主ならずば口說き落し我が妻にせんものと。思ひ初むるは日に幾度。　詞我が身で我が身に意見を加へ。勿體ない恐しいと。又思ひ替へて心を改め。忠義を盡くすと思へども生れ付いての色好み。　地淫犯の病ひを顯はし夢の內とはいひながら。主君に對して不義を言ひかけ。剩へ討ち奉らんとしたりしは。よつく武運に盡きたるかと　スエテ暫し涙にくれけるが。　地色飛退さつて頭を下げ。　詞御臺樣若君樣。夢の間の不義不屆。　地眞平御免下されと。恐れ入つての　フシ三拜九拜。　地色親子の人は正體なく寢入りし額に汗たら〳〵。魘はれ給ふに走寄り。申し。申しと搖り起せば。二人ながら起上がり。顏を詠めてヤア　詞其方はまだ寢ずかと。　地齒の根も合はず面色變り。若君を押留ひ立退き給へば南無三寶。夢とはいへど通ぜしよと。胸に砦石押込む如く。切なき心を押鎭め。　詞お疲れも出でしにや。魘はれ給ふに驚きて目を覺まし候と。　地言ひくろめても氣は濟まず。　フシ案じ煩ひ居る所へ。　地色群り來る人音に何事やらんと女之助。立上つて眼を配り。たとへ道行く旅人たりとも見咎められては御爲惡しゝ。御兩所は笠深々田舍道者の臥したる體。拙者も暫し隱れんと。兎角しつらひ片陰へ。フシ忍びて。樣子を窺ひゐる。　地色程なく來る大勢は學文路の宿の百姓ども。中には庄屋が智慧あり顏。　詞コレ皆の衆。此所の殿樣。大內之助義弘樣がノヨ。遙々の海山を越え直に登つて繪圖をみんなに一枚づつ渡してノヨ。此繪圖に合うた者を。縛つて來いとの言付けでござらよ。三十許りなよい女性とノヨ。十ばかりは美しいちつぺいとのノヨ。また三十餘りな色とり男と。どうやら人の女房を。息子共に盜んでかけおなどと見えるぞや。どうでもむつかしい尋ぬ者。見付けたら金になりますらよ。共吟味に精出さしやれ。誰が縛つても庄屋だけ。褒美はおれと半分わけノヨ。　地斷

つて置いたぞと。いふを聞兼ねしやばり出る。所でちつと理窟者。男を嚇く玉屋の與次。朱鞘の大だら落差。立ちはたかつてコレ爰な庄屋殿。詞拔け作でも身内が慾ぢやの。近年は代官によい人がわせた故。所も騷かず物靜かでよかつたに。何やら又いひ出して代官所へ呼付け廻り。ちつとばかりの褒美であろが。澤山さうに三人まで縛つて來いとはうまい殿様。騙されておぬく殿が。括たら褒美を取り。ハヽハヽどこへ褒美。和御寮の様なうまい和郎に。括られる人間があるものかいの。役に立たぬ口叩かずとサア。地早う去にませうと。先に立つをコリヤ待て玉屋。詞われが今の言分を。この智慧者が勘辨するに。褒美が少なけりや。見付けても取逃がす思案ぢやな。さつきの言付けをどう聞いたぞ。庇ひ立はならぬぞよ。お尋ね者を助けたら。助けた者の首ころりノヨ。是も斷つて置いたぞよ。ナア〳〵いづれも去にがけに慈尊院の境内を探して去のらぢやあるまいか。もしも屈で居よつたらノヨ。よつ程な拾ひ物と。地大勢引連れうそ〳〵と。二人の變姿見付け出し。詞コリヤ〳〵爰に何やら居るぞ。地くゝれ〳〵と立ちかゝるを。女之助飛んで出で。詞何奴なれば旅人を脅やかす。地近寄つたら撫斬りときつば廻せど事ともせず。爰に居る大金を。攫んで去ぬると取卷くを。詞ヤ汝等は人賣りか盜賊か。地目に物見せんと刀の電光。無二無三に斬りかくれば。フシ風に蜘蛛の子散らすが如く。地逃散りながら口々に。詞ヤイ〳〵玉屋。算用の合うた三人。見ぬ顔して助けるかと。地庄屋の一言聞捨て難く拔合はせて支へたり。詞さてはおのは盜賊の張本か。地一人も餘さじと女之助は根限り。火水になつて斬結ぶ。死物狂ひにさしもの大勢。與次はもとより構はぬ氣の。人が逃ぐれば共逃げに。フシ逃げて跡なくなりにけり。地色長追ひせば惡しかりなんと。刀を納めて二人を呼出し。かく行先を盜賊に圍まれては叶ひ難し。此間に御供していづくへなりとも立忍び。夜明けてお山へ登らんと諫め申せば尤もと。御臺若君かひ〳〵しく。帶引締めて草鞋の紐。結ぶ間遲しと三人は。跡をも見ずして。三寶雲隱れ。星の逢夜と結び合ふ。地學文路の宿の玉屋の與次内には水が月影の。ませども宿へ歸らぬは心許なの日暮れ過ぎ。妻のお埒は埒明の夜なべを捨てゝ圍爐裏焚くゝ自由自

在な我が世帯雖子に沸る一煎じ。女夫の仲のこつちりの出端も妹脊の。フシ花香かや。地色娘かどたは門の戸をさすと居眠る宵まどひ。詞コリヤそこなお船頭。モウ船を漕出すか。ほんにやれ〳〵嗜めよ。連合ひ與次殿は。遂にお代官の顔も見ぬ人。地それに今日呼びに來て今に戻られず。おれよりマア其方が案じる筈何故と言や。詞アノ與次殿とは生さぬ親子。今にでも戻られ。眠たさうな顔見せて心の義理が立つものか。寢所でもして置けと。地叱るも親身聞くもおろ〳〵。詞母様こらへて下さんせ。昨夜の大師講の持越でとろ〳〵が來ました。地デエ寢所をしておこと。小廻りすればヲ、それ〳〵。詞もう初夜過ぎ。地追付けであらう寢間掃いて寢所しや。枕はおれが直すぞと二つ並びやを言兼ねて。娘頼まぬ心意氣。フシいらぬ遠慮と見えにける。地色此家を力に女之助御臺若君後に圍ひ。息をばかりに駈來り門の戸忙しく打叩く。お埒は驚き駈出でしが。待てよ夫の足音ならずと。詞何者なれば夜に入つてけたゝましやと咎むれば。いや苦しからず。我々は旅の者。足弱二人召連れ盗賊に出逢ひ。やう〳〵切拔け。是まで參りしなり。地色三人の命助けると思召し御圍ひ下されなば。世に有難く候はんと。餘儀なくいふに厭ともいはれず。詞主の夫は留守なれども。左程の難儀見捨てるもお笑止。地暫し此方へお入りあれと門の戸あくれば三人とも。命の御恩と追從し。フシ内へ通れば。地色女房が心をつけて表を締め。イザ先づあれへと圍爐裏の陰。互に見合す顔と顔。詞ヤお前は繁氏卿の御臺所。牧の御方様ではないか。さう言ふそなたはお埒ちやないか。ナニ以前の女房かと。地女之助も吃驚のてもと。さてもが一時に手を打ち。フシ共に呆れしが。詞さるにても此お姿。地何故これ迄遥々とお越しありやと尋ぬれば御臺は涙を浮めながら。詞連合繁氏卿御遁世遊ばし。國は大内に惱まされ。命危く逃げのび。わが夫高野にましますと。地色人の噂を力にて此所まで來りしと。語り給へば共に目を摩り。詞いかい御苦勞遊ばすの。地色若君様の御成人何か思へば。一昔。變る浮世の有様と。フシ憂きを涙に語り合ふ。地色女之助あたりを見。詞其方と離別せし折から。かどたと言ひし水兒を添へしが。地見事育て上げたるか無事で居るかと尋ねの詞。齒に衣きせず。詞コレいは

れぬ昔をお尋ね。過りなき身に暇の狀。是非なく故鄕へ歸り年よつた母樣。地色乳呑子抱へどうして暮す當もなく。途方に暮れし折から。詞此家の主も以前は武士。尾羽打枯らした互の落目。共過ぎにするならば。母樣ぐるめ養うてやろとある。地色二度の夫と思へども親の爲子の爲に。此家へ嫁入つた其年に母樣を見送り。詞娘も成人したけれど何の此方に逢はさうぞ。地言出しても下さるなとけんと言はれて女之助。むつとはすれど宿を借る。フシ無心に詞も無かりける。地若君は大人しく只何事も堪忍し。今夜爰に泊めてたもと涙ぐんだる御仰せ。詞コハ勿體なきお詞。地見苦しけれど一間もありいざあれへ往てお休みと。申し上ぐれば御臺所。主が戻り給ふならよきに賴むと打萎れ。石動君の御手を取り。フシしを〳〵立つて入り給ふ。地色女之助はつきほなく共に奥へと立上るを。お埒はやがて押しとどめ。詞御兩所はお主筋好んでもお宿を申す。其許には宿叶はず。地何處へなりともお越しあれと。差止められて重なる業腹。詞ヤなめ過ぎた女め。御大切なる二方を預け某いづくへ行くべきぞ。お主ばかりの誼を思ひ。地夫の誼は思はぬかと嵩にかゝれば。詞サア其誼ぢやに依つて猶ならぬ。ソリヤなぜに。さればいの。今自らには玉屋の與次とて夫あり。其留守の間へ以前の連合。泊めてくれとあつた故。泊めましたとはどの口で。どう言はれうぞ無遠慮人まだ其許は昔の道樂直らぬの。お二方は此お埒が命にかけて預つた。地氣遣ひせずと宿なくば軒の下でも一宿あれ。あた自墮落なと引立てゝ。有無を言はせず門の戸を。明けて表へ突出し。理窟て締める鑼は押すに。押されぬ心の錠。幼馴染の合鍵も工合違うて海老の腰屈めながらに軒の下。暫しと宿る。フシばかりなり。地色程なく歸る玉屋與次道のどまくれ夜を更かし。闇を照らする禿頭門の柱でこつつりこ。あ痛し爰ぢやと打叩く。お埒は待兼ね走寄り。あけるや否やテモけうとい。今迄どこに何してと。おきまりなる。フシ悋氣口。詞置け〳〵。今夜はお上の御用筋。夜が更けても權柄。しやつとも言ふなと圍爐裏の火を。地差しくべる內表より女之助が齷齪として。詞一旦の理に逼り軒に一宿致せども。寒風烈しく身も冷え渡る。地御亭主もお歸りと見受けたり。一夜の宿と乞ひにける。與次は聞き耳。

詞ありや何ぢや。何いふのぢや。イヤあれは最前旅人が盗賊に出逢ひ。難儀に及ぶとありし故。引くに引かれず足弱二人は泊めたれども。地お前が留守故男子御は遠慮して。外に寝さして置きましたと。語ればハテそれは大事ない事。詞これ旅の人。外に寝てなら寒からう。こち入られい。圍爐裏にあたつて寝られいと。地だらくく詞も情は嬉しく。フシ門の戸あけて小腰を屈め。地御免なれとてもの事。少し焚火の御報謝と。何心なく圍爐裏の端。燃える明りで顔見合せ。詞ヤア。わりや最前の侍かと。地俄かに變る與次が氣相。女之助も拔放し。詞さういふ汝は件の盗賊。出逢うた所が百年目と。地斬りかくれば拔合せ。フシ髮を最後と斬合ふ有様。地お埒は夢か現にも様子は知らずヤレ待つて。暫しといへど聞入れず。詮方つきて茶の水を引すくうて燃える火に。ざんぶとかくればばつたりと。消えて闇の夜二人はハツト。猶豫しながら。フシ聲かけ合ひ。詞おのれ盗賊そこ引くな。地侍逃げなと鵜の目鷹の目。とめるお埒も暗がりで。フシすべき様なき折からに　コハリ又も圍爐裏がくわつと燃え。そこにをるかと互の切先。ナホス南無三寶と杓の水ばつとかくればふつと消え。目先手先も知ればこそ。詞盗賊め。侍めと。地聲を力の減多討ち。フシ燃えると斬合ひ。消えると探り千變。萬化の戰に暫し時。をぞ三更移しける。地色隙取る内に圍爐裏の明り。七轉八倒お埒はあわて。一間の障子引きはづし斬合ふ中へ打ちかぶせ。身を捨て錘と乘りかゝれば。互の太刀先抑へられ。思はずどつかと居坐つて。フシほつと息つぐばかりなり。地色音に驚き御臺石動手燭携へ駈出て給へば。お埒はせき上げ是待つてたべお二人。詞わけて我が夫與次殿。此方の事は所でも。人も恐るゝ男一匹。盗賊よ追剝よと。名を立てられて切先勝負。地若しもの事があつた時妻子までの面汚し。何故さもしい名は取り給ふ。様子を聞かねば髮放さぬナア仔細はとせく詞を。詞尤もぢや女ども。全く某盗みはせず。其侍が同道の足弱二人はお尋ね者。則ち此國の領主。筑紫より大内義弘殿到著あつて。此繪圖に合ひし者當國へ來りし由。搦取つて渡せとの仰せ。地證據は髮にと懷より。出して見せたは紛ひもなき。御臺所と若君の。お姿書きし寫繪に。人々ハツト胸つかへ肝を。フシ冷するばかり

なり。地色お埒は常から頼もしき夫の心をよく見拔き。コレ其繪のお二人。いづくいかなる御方と。知つて此方は捕へるのか。イヤそりや知らぬ。人違ひでも大事なし。捕へて來いとの仰せ。身にかゝらねば念押して。問ふ間もなく歸りがけ。慈尊院で出くはし見遁しならぬ庄屋の一言。其意地持つて此場の出逢ひ。地構ふな退け〳〵そこ放せと。刎退けろをイヽヤ放さぬ。詞斯うなるからは何を隱さう。これなるお侍は自らが前の夫桑原女之助。お供しられた二方は。其繪に違はず筑紫大名。加藤左衞門繁氏樣の御臺若君。地わしが以前のお主ぢやと。聞くより興次はほつと飛退き。左樣と存ぜず無禮の段。眞平御免と氣折の平伏。心許さぬ女之助反打ちかけ。詞ヤア俄かの三拜喰はぬ〳〵。我等も昔は家來筋などと。古手を以つて油斷させ。大内が方へ注進する下心か卑怯者。地立上つて勝負せよと勢ひかかれば。詞ヤレ早まり給ふな。其言譯見する物あり。暫くと押宥め。地色簞笥より刀一腰取出し目通りに据ゑ。いづれもお見知りある刀。立寄つて見給へといふに人々氣を付けて。見れば目貫は菊流し牡丹に獅子の國鍔は。紛ひもなき夫の差替。げに〳〵繁氏卿のお刀。詞こりやどうして其方が所持したる仔細はと。地不思議立つれば。詞ヲヽ不審は尤も。もと某は播州浪人。尾羽打枯し都方へ。奉公稼ぎに上る折から。八幡山崎の間狐川の渡しにて。さる浪人と口論仕出し。刺違へんと致せし所。其場へ繁氏卿通り合はされ。雙方一分立てよと。御差替一腰宛下し置かれ。地色命助かるのみか外聞の腰を窠ぎ。それより武士奉公のあり付きなく。此國の土民となつては候へども。詞御恩は忘れぬ昔氣質。命の親の繁氏卿。その御臺若君と聞き。地何と手向ひ申すべき。御疑ひを晴らされ御譜代同然に。思召し下されよと。餘儀なくいふに御臺は嬉しく。げに其事は御物語ありし事。扨は其時お刀を貰うたは其方よの。遣つたる人は御遁世。御跡慕ふ我々が。力となつて今一度。繁氏樣に逢はせてたも。頼み少なき世の中やと。ツシ卿ち給へば。詞お氣遣ひ遊ばすな。天地の間に御座あるなら尋ね逢はせ參らせんと。地奥底もなき心底を見込んで猶も女之助。詞ホヽ、お頼もしき御一言。とてもの事に御誓言で承りたし。其上頼む事ありと。地いふに居直り金打し。詞諸天善

神は愚か。佛意をかけ二言なしと。　地色聞いて安堵の胸を据ゑ。何思ひけんどつかと坐し。差添拔いて我とわが。腹にぐつと突立つる。人々是は狂氣かと驚き騷げばアヽ。　詞騷ぎ給ふな方々。思ひがけなき最後故。御驚きは尤も。何を隱さう某は。生れ付いて好色深く。兄監物太郎が疑ひを晴らさん爲。守宮の血を腕に塗り。　地誓ひを立てゝ國を出で。心を心で嗜めども。情なや宵の夢。わりなくも御臺へ纏綿。聞入れなきを手にかけて殺さうと迄したりしが。　詞慈尊院の時知らす。鐘の響きに夢さめて。いつにない御臺には。我姿を見て御恐れ南無三寶。　地夢とはいへど通ぜしか。はや切腹とは思へども。我なくなりては御兩所を。守り奉る人なきと。さあらぬ體にて是迄來り。今與次殿の心底見込み。賴み置いて相果つる。　詞申し若君樣。是なる與次殿を力となされ。父樣のお行方尋ね。目出度う御對面遊ばせや。地何の因果で此樣に。不所存には生れしぞと。我と我身の悔み泣き　フシ見る目も。共に哀れなり。　地色與次はわざと涙を隱し。　詞夢は五臟の煩ひ。なぜ本心を改め御先途を見屆けぬ。　地切腹とは腑甲斐なしと恥しむればイヤナウ。詞本心を改めても。夢となぐるになぐられぬ。仔細は腕に塗つた證。心の迷ひで守宮の血が。　地これ此如く消えたるは。罰か報いか天命か。兄監物へ言譯の。種を失ひ是非なくも。斯くは計ひ。　フシ申せしぞや。　地色よし證が落ちぬとて。最早御臺は虎の子を、供に連るゝと思召し。片時も心安かるまじ。せめての冥加に御主人の。お心休めにする切腹。これ迄盡くせし忠節を。無にして死ぬる跡の儀を。賴む〳〵といふ聲も。　フシ弱り果てたる息づかひ。　地色與次は哀れの袂を絞り。せめて最期の思ひ出に。娘かどたに逢はさんと。呼びに立つを女房が涙ながらに引きとゞめ。　詞定めて樣子を聞いても居ませう。駈出る筈が駈出ぬは。前の親を慕ふかと。思はれまいと思ふから。其氣な娘を呼出して泣くも泣かれぬ苦をさそより。やつぱり小陰で存分に。　地泣かしてやつて下されと。子に擬へたる我涙。保ちかねて思はずも　スエテわつと。　フシばかりに泣叫ぶ。　地色御臺も共に御涙。惚れる身よりも惚れらるゝ此身のつらさ悲しさを。推量しやとしやくり上げ。歎かせ給ふ御聲が。冥途の形見南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と差添を。拔くが此世の暇

乞ひ。フシ消えて果敢なくなりにけり。地色ハツトばかりに人々の縋り泣入る折こそあれ。遙かに聞ゆる人馬の聲。すは事こそと與次は突立ち。ノリ詞コリヤ〳〵女房。泣いて居る所でなし。察する所討手の輩と覺えたり。思ふ存分働いて隙間を見てお供せん。地先づそれ迄は一間へ入れ。聲すな音すな消斷すな。行け〳〵急げとフシ追ひやり追ひやり　地七の圖まで尻引からげ。好む所の段平を拔翳して待つ所へ。馬上に跨がる大内義弘。松明提灯星の如く。手の者引具しどつと駈寄せ。詞ヤア〳〵此家に繁氏が御臺悴石動。圍ひ置いたる條遠見の注進。急いで縄かけ渡せばよし。地異議に及ぶとあばら家を乘潰してくれんずと。くわつと睨めたる兩眼は。海に入り日の射す如く。フシあたり眩く見えにけり。地色内にはわざと音もせず。詞すは風くらつて逃げたるか。踏込めやつと呼ばはる聲〳〵。地捕つた捕つたと捕手の役人。われ劣らじと込み入るを。得たりと與次は。眞向梨割車斬り。さしもの大勢たまり得ず。一引きさつと引いたりける。地色大内は馬上に齒がみをなし。詞所の代官駒形一學。あれ蹴散らせと下知すれば。地承ると駈來る侍早縄たぐつて大聲上げ。詞やあ〳〵與次。いか程に働くとも。斯く十重廿重に取卷いては叶はぬ〳〵。異議に及ぶと飛道具。いかに〳〵と罵つたり。地色流石の與次も飛道具に心おかれし折からに。一間の内よりコレナウ御亭主。とても遁れぬ我々。急ぎ縄かけ身の難儀。遁れてたもと障子を明け。出づるを見れば妻のお埒。娘かどたを石動に仕立てゝ出づる主思ひ。それと悟れど恩愛に。心後れて手を仕へ。詞ホヲ、其御覺悟はさる事なれども。一旦圍ひし某が。むさ〳〵渡す無念さを。地御推量下されよと夫婦別れの涙をば。目に浮ぶればお埒も萎れ。詞自らは覺悟の前。只いとほしきは此石動。地あらぬ形の男髮不便にござると共泣きに。泣きしをれしが。與次はつつ立ち是是役人。詞お尋ねの兩人。縄かけてお渡し申す。地受取られよといふ聲に。駒形一學内に入り隙間あらせぬ氣配り目配り。是非なく縄をかける内御臺は駈出で。ナウ悲しや妾こそと言ふ口押さへて立身で隱し。親子を引立て引渡す。表に控へて大内は大聲。詞コリヤ〳〵一學。渡し置いたる繪圖あるべし。引合せて受取れと。地遁れがたなき鶴の一聲。

鷺を烏と爭うても。爭ひにくき姿繪を。明りへ出して引擴げ。見るも一生懸命。遁れぬ所と與次は身構へ。つく〳〵詠めて駒形一學。詞繁氏が御臺悴繪圖の通りに違ひなしと。地表へ答へる慥かの訴へ。與次は夢かと念に念。其詞に相違ないか。地色跡で違變召されなと。打つたる釘の詞を返し。詞ヤア入らざる馬鹿念。駒形一學春秀が受取つたに相違はない。よく繩かけて渡したよ。當座の褒美に一腰くれると。地差添拔いて提灯の明りへ出したは繁氏の狐川にて情の一腰。詞ヤこりや我夫のお差替。扨は拙者と一時に。御恩を受けた侍かと。地いふ聲高いをシイしつと。押さへて消して引立つる。昔忘れぬ武士や見送る夫も妻子をば。恩に替へたる涙の雫。身に降りかゝる御臺の歎き。餘所に見捨てるお埒は忠義。かどたは實の父に迄。おくれの髮の男髷。今日は石動明日よりは。寶の川原の石の塔。十づつ十は百歳と。祝ひ飾りし命をば。捨てに行身と捨てにやる。思ひは同じ思ひぞと。泣いては送り送られて。屠所の歩みと歩み兼ね。行きては戻り戻りては泣く音もつらき明烏。かはい〳〵の。聲名殘り引かれて。こそは別れ行く

第五

地陰德あれば陽報あり賢き教へ眼前。地色御臺所石動丸玉屋の與次が介抱にて。繁氏卿の御在所尋ね求める高野山。小石交りの細道を爪先上りたど〳〵と。辿り給ふぞ ッシせつなけれ。御痛はしや。母君は。習はぬ旅の疲れにて御心地例ならず。歩み惱みて休らひ給ひ。詞ナウ與次殿。誠や人の習ひにて榮え衰へ。浮き沈みありとは豫て知りながら。餘所の事よと思ひしに今身の上に思ひ知る。地色是につけてもいとほしきは內方お埒と娘のかどた。我々が身に代り敵の中に憂き苦勞。定めて憂目に逢ふやらんと案じ過しの御涙。共に萎るゝ詞を嗜み。詞ハア、譯もない御歎き。彼等が御身に代りしは。お主大事と一途の忠義。さは言へ駒形一學は。情を知つたる侍命には氣遣ひなし。地斯樣な小事に御心を痛め給ふが御病氣の障り。必ずお案じなさるゝなと。口にはいへど心には。胸迄のぼす涙を抑へ。詞申し若

君様。親子御一所にお供して尋ね廻り。殿様に逢はせませんと存ぜしに。この御病氣では道捗も參らず。殊に女人禁制の御山。寺中へは行かれぬ御身。お前ばかり先へ駈拔け。地色繁氏剛を尋ね給へ。私はそろ〳〵と御臺様の御供し女人堂にて待ち申さん。フシはや疾く〳〵と勸むれば。地色今日ぞ戀しき父上に尋ね逢ふよと嬉しくて。御心はせかるれどやう〳〵二歳の時別れ。それから逢ひ見ぬ父様なればお顏さへ知らぬもの。何を便りに尋ね逢はん殊には母様の御病氣見捨てゝ一人わしはいや。三人ながら一所にと。フシ離れ難なき御風情。地御臺所は目を開き。詞ヲヽ、道理道理さりながら。其方が側を離れぬとて此病が治るにあらず。片時も早く父様を尋ね女人堂迄お供しや。地殿様の顏見るならば耆婆扁鵲が藥にも。百倍ましたる藥となり本復するに。フシ疑ひなし。地色お顏は知らずとお名を名乘り。加藤左衞門繁氏の今道心は何處にと。出家に逢はゞ尋ねよや。詞湯水を取つての介抱より是に增したる孝行なしと。地息もたよわき御仰せ。幼心に聞分けて。詞父様のお顏を見て。御本復さへある事なら成程私が先へ參り。お在所を尋ねましよ。地跡からそろそろ與次を伴ひ。女人堂迄。お出であれと。しを〳〵濡るゝ笠と。杖。取上げて立ち給ふを。顏つく〴〵と打守り。詞そんなら其方はもう行きやるか。地西も東も知らぬ身を。手放してやる氣遣ひさ。跡で案じはいかならん父様に巡り逢うたらば。隨分早う便りをしや。暫しの別れといひながら人の命は電光石火。打つ石の火より果敢なき譬。詞母が顏もよう見ておきや。そなたの顏も詠めんと　地物が知らせし暇乞ひ。傍で聞く身の胸苦しく。與次は詞も泣く涙。フシ目をしばたゝき。あちら向く。地若君何の頑是もなく。然らば母様後程と立出で給ふ。詞コレ山道を餘所見して躓くな。地怪我ばしすなと氣を付けて見送はし〳〵別れたる。是が此世の名殘とは後にぞ思ひフシ知られたり。地色與次は御跡見送りて涙を拭ひ。詞サア是から御臺様。坂の間を負ひ參らせん。地いざさせ給へといふ所へ。女房お埒娘のかどた。息をばかりに駈來るを見るより喫驚。詞ヤア女房か。ナウ娘のかどたかと。地御臺も共に御驚き浮木の龜の對面と。悅び給へば溜息つぎ。詞不思議に命助かりしが御運の末。折角親子が心を碎

きし。お身替りも、贋者と。新洞左衞門に言ひさがされ。いとほしや駒形一學殿。直ぐに其場で御切腹。我々も危き所をやう〳〵切抜け逃げたれども。地追手の來るは知れた事。早う立退く御思案と。いふに驚く與次が面色。詞出來した〳〵しかし。此如く御大病たやすく遁れ逃げ難し。地色若君は早や御山へ我も娘を引連れて。御臺樣を肩にかけ女人堂に預け置き。立歸つて防ぐべし。詞其間を汝踏みとどまり。地暫らく追手を支へよと。差したる一腰投出せば。詞ヲ、それ〳〵よい合點。爰は妾に御任せ。地此所より一寸も追來る敵を山へは登さぬ。フシ氣遣ひあるなと。男勝り。地脇差取つて脇挾めば。よくせよ拔かるな女房と。御臺所を負ひ參らせ。娘が手を引き逸散に　オクリ山深。へくこそ　フシ急ぎける。地色サアあなた方さへ落したら心にかゝる事なしと。獨言する折こそあれ。麓より來る大勢は大內之助が雜人ばら。おつ取卷いて辭々に。詞ヤア贋御臺の喰はせ者逃ぐるとて逃がさうか。誠の御臺石動はいづくへ落した。有樣にほざき出せ。僞ると肝先へ太刀魚がお見舞と。地毒き騷げどちつとも臆せず。詞ムゝ親子御の行方が聞きたいか。それは天竺の四日市。大儀ながら上つてござれ。テモ咽のえらい女め。地叩き殺せと拔連れ〳〵斬つてかかればまつかせと。同じく此方も拔放し。詞どれ御自慢の太刀魚を。箔摺剝す繩だら料理。切味を賞翫と。地多數を相手に縱橫微塵火花を散らして。三重戰ひけり。フシ女なれども。地忠義の一念飛鳥の如く駈廻り。なぐり立てたる太刀先に。コハ敵じと雜人ども。はふ〳〵逃げて失せにけり。舞詞ヤレ此隙がよい引き時。地長居は恐れと逃ぐるも追はず。御臺所と夫の跡。ナホス慕ひてこそは。三重、行く空の。フシ雲間に近き。八葉の。峯に紫雲の靉靆し。高野山と聞えしは三面に山連なり。源一水にして萬水東に流れ。大師二犬に道を習ひ。開き　フシ始めし靈地とかや。林清地いたはしや石勒丸。かゝる難所をたど〳〵と。心も空に浮草の。根ざしの父は顏知らず。名のみ知るべに。尋ね行く。　オトス袖の涙ぞ。フシ哀れなるナホスフシ思ひ高野の。谷川や弓手は岩間。馬手は天野の山嵐。峯に煙の。一結び。見上げて通る。不動坂。踏みも通はぬ。丸木橋名殘り情も橫吹きの。嵐、木の葉。散果てゝ。スエ心細道つく杖

は。　アミドおりつ登りつ。行先を。問へど岩根の松かげに。　フシ暫し。休らひ給ひける。　謡サシ百年の榮耀は風の前の燈火。悟れば我も佛なり。ナホス煩惱菩提と。　フシ諦めて。　地色加藤左衞門尉繁氏入道。苅萱道心と名を改め。佛法修行の山坂を。辿るもフシ後世の便りかや。　地色石動親子の機緣にや思はず傍に走寄り。　詞申し御出家樣。　地この御山に今道心のましまさば。敎へてたべとありければ。　詞コハ興がる少人かな。九百九十の寺々。毎日入り來る初發心。昨日剃つたも今道心。一昨日剃つたも今道心左樣に尋ね給ひては知れ難し。俗の時の名を言うて。　地尋ねられよと身の上の　オクリ事とも。知らず。　フシ仰せある。　地色されば/\よ尋ぬるは自らが父上。二つの年別れし故お顏も見知らず。元は筑紫松浦黨。加藤左衞門繁氏樣と。言ふより扨は我が子かと。取縋らんとしたりしが待て暫し。佛前にて誓ひを立てたる恩愛妹脊。爰ぞと思ひよそ/\しく。　詞ムウ年も行かぬに遙々と。慕ひ來る志。　地色誠の父が聞かれなば嘸嬉しくも懷かしく。飛付く程に思されんさりながら。　詞此山の掟にて。縱へめぐり逢うたりとて。名乘り合ふ事かつふつ叶はず。　地色はや/\國へ歸り。母御を大事にかしづくが。又一つの孝行と。フシいひ敎ゆれば。　詞イヤナウ我が國は大内といふ者攻惱し。母樣諸共この山の麓まで參りしが。　地悲しき事は母樣が道の疲れに煩うて。命の内に只一目父に逢はせてくれよとのお歎き。情と思うて御在所。御存知ならば敎へてと。目に持つ涙はら/\と。抑へ兼ねたる有樣に。　詞我こそと名乘つて聞かそか。いや勿體ない師の御坊の戒め。と言うてはる/\來たものを。知らず顏見ぬ顏が。　地どうなるものぞ不便やと。胸にせきくる血の涙。こたへ兼ねて思はずも　スエわつと。ばかりに泣き給ふ。　地色石動丸は目賢く左程に歎き給ふのは。もし父上ではあらざるや。早く名乘りて給はれと。縋り歎かせ　フシ給ふにぞ。　地色亂れ心の折ふしに。後の方の岩陰より。師の阿闍梨の聲として。　詞ヤア/\苅萱。棄恩入無爲　地棄恩入無爲の。誓ひを忘れ給ふなと。制せられて苅萱は。起上つて振返り。ハア、さうぢや。迷うたり誤つたり。今此三界悉是吾子。いづれを我が子と思ふべき。師の手前も面目なしと。衣の袖を打拂ひ/\。　詞ハレ小ざかしき少

人かな。　地哀れを共に見捨てねば我を父よと縋る事。穢らはしや忌はしや。　詞お事が尋ねる繁氏入道。此山におはせしかども。諸國修行に出て給ひ今は行方も知れざるぞ。　地色急ぎ下山し母親の。病氣の介抱召されよと。　スエつれなく言へどどこやらに。　フシ殘る詞の彌勝り。　地色なに父上は行方も知れず。此山におはせぬとや。ナウ情なや淺ましや。我はともあれ母樣が。焦れ死をなされうかと。そればつかりが悲しうて。跡へ戻るも戻られず。似た人にてもあるならば。逢はせてたべと搔口說く心ぞ。　フシ思ひやられたり。共に張裂く。思ひをば押隱して懷より。包みし藥取出し。　詞コレ是は師の御坊一萬座の護摩を焚き。調合ありし妙藥。母御に用ひ看病あれ。來た道筋は難所にて草臥足では叶ふまじ。こちらへ行けば花坂とて平地も同じ事。　地色馬もあり駕籠もありいざ！〳〵立つて行かれよと。心强くも引立てられ。　長地石動丸は泣く〳〵も藥とあるを力にて押戴き〳〵是非もなみだの泣別れ。　フシ迷ひ道をば。そこ爰と敎へながらも苅萱は。心許なさ思はずも。引かるゝ緣の友綱や見えつ。隱れつ。三重慕ひ行く。　地息をばかりに玉屋の興次御臺所を負ひ奉り。娘を引連れ女人堂迄來りしが。跡先眺め片陰におろし參らせ。お心持は如何ぞと申し上ぐれば御臺所。苦しき體を押隱し。自ら事は思はずとも。お埒を救うてたもるのが。我が爲の良藥と。宣ふ詞に跡先を。思ひ廻して猶豫せしが。　詞いかさま女の手業に追手を防がせ。　地見捨てゝ置くも心許なし。仰せに任せ引返し申すべし。　詞コリヤ〳〵かどた。大事の〳〵御臺樣ぢやぞ。お傍を離れず御介抱申せ。　地お腰でも撫らしてござりませ。つい往て參ろと口輕く。　フシ飛ぶが如くに引返す。　地色御臺は重る病ひの床。涙ながらにナウかどた。　詞向ふの道より石動が。歸る姿は見えざるか。　地戀しの我が子や。なつかしの我が夫やと。彼方を見ては打倒れ。此方を見ては。伏轉び最期も近き御有樣。かどたは悲しくコレ御臺樣。　詞父樣や母樣の。歸らしやる迄どうぞマア。　地死なずに居て下さりませと　スエテあどなき詞かいしよなき。　フシ娘の肩に。介抱せられ。　詞自らも石動が便り聞く迄〳〵と氣の張弓も弦切れて。　地死ぬる今端に　フシなりしぞや。　地色興次夫婦が歸られなば。石動事をくれ〴〵も。頼んで死

んだと言うてたべ。せめて最期に夫や子の。顔見る事が叶はずば。聲なと聞いて死にたいと。御山の方を打眺め。眺めても口説いても。逢はれぬ事かとしやくり上げ。泣く音も辛やい。き切れの露の命の果敢なくも。フシ消えて跡なくなり給ふ。地色かどたはあわてナウ是申し。申しといへど其甲斐も。なくも泣かれず立つたり居たり。母様呼びに走らうか。父様はなぜ遲いと。坂を駈けおり聲を上げ。詞父様なう母様なう。御臺様が死なしやつた。地コレなう戻つて下されと。聲をばかりの叫び泣き　フシことわり。せめて哀れなり。コハリ頃は臘月雪空に。餌食乏しき山鴉。ナホスかはい。可愛を引替へて。フシ死骸にたかれば。地ナウ悲しやと駈寄つて。あなたを追へば。こなたから集りかゝれば詮方も。小石を拾ひ打つ礫そこよ。爰よと駈廻り身體も息も絶える程。父を呼び鳥を追ひ。追ひめぐれども小娘の。フシ泣く音もつらき折からに。地色石動丸は徒歩跣かくを見るより走付き。群る鴉を切拂ひ。あへなき死骸を揺起し。ナウ情ない母様。斯くなり給ふ事ならば何しに傍を離るべき。父上には得逢はず。お前に別れて私は。何とならうと思召す。詞これ結構なお藥を。御出家様に貰ひました。是をあがつて健になり。たつた一言石動かと。地物いうてたべ起きてたべと。藥取出し嚙みこなし。甲斐なき母に吹込んで。ナウ母様々々と。起立て抱きかゝへ　スヱテ前後。不覺に泣き給ふ。地色かゝる哀れを遠目から。見るより思はず菊萱道心。走寄りしが是迄さへ。立てし誓ひを今更に。無下にはせじと目を押拭ひ。詞コレ〳〵少人。悲しきは道理ながら。いたく歎くは佛の迷ひ。地いで〳〵回向し參らせんと。口に唱名心には我を慕うて遥々と。海山越えて來りしに。妻子かともえ言はずに。餘所に扱ふ我が心。草葉の蔭からさぞ恨みん。赦してくれよ我が妻と。念誦に交る胸の内。フシとゞめ兼ねさせ給ひけり。地色然る所へ與次夫婦駈戻り。詞ヤア御臺様は御最期かと驚き騒げば。地女房が菊萱を一目見て。なうお久しや。繁氏様といふに石動。詞なに此お方が父様か。地なつかしや戀しやと縋り給へば衣の袖。打拂ひ〳〵逃げんとし給ふ後より。詞ヤレ待ち給へ我が君と地聲をかけて監物太郎。大内之助に大綱かけ息をばかりに駈來り。詞勅命受けて一戰に討ち勝ち

生捕つて參つたり。如何計ひ申さんと。地言ふより與次が躍り出で。詞何かはなし急いで首と。地既に斯うよと見えたる所へ。暫し〳〵と新洞左衞門。飛鳥の如く飛來り。詞謀叛人とはいひながら。未だ旗を上げたにあらず。一家中の歎きを思召し。地一命助け給はれと平伏すれば苅萱道心。助けるとも殺すとも私には計ひ難し。都へ行きて奏聞遂げ。命乞ひして得さすべし。詞それを我が子石動が。筑紫へ送る轢と。セメ地仰せによつて引立つる大惡無道の强敵も。我が神國の御注進繩。治まる御代の例とて。惡人亡び國安全。民も豐に萬々歲。千代を祝ひし筆の跡長くも。語り傳へたり